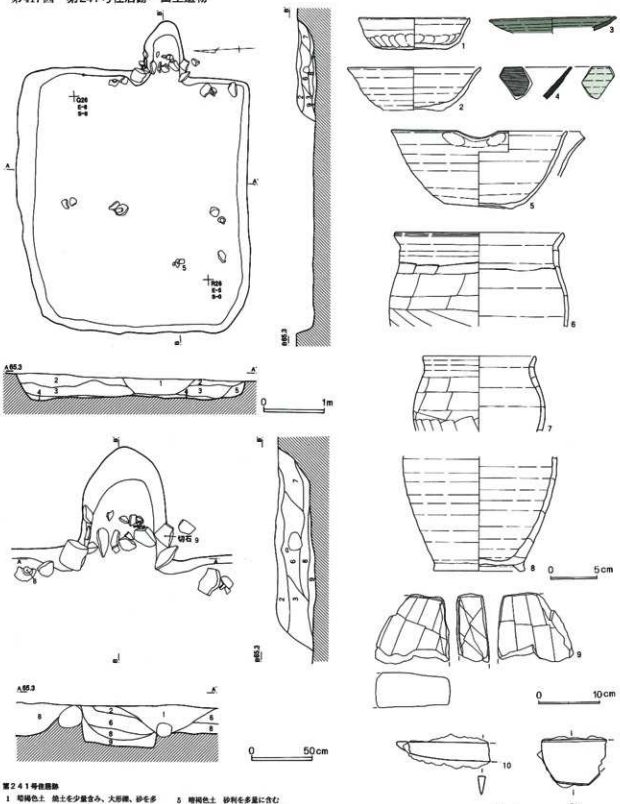
第417図　第241号住居跡・出土遺物



第241号住居跡

1　暗褐色土　焼土を少量含み、大形礫、砂を多量に含む
2　暗褐色土　H軽石を少量含み、砂を多量に含み、暗灰褐色土を部分的に含む
3　暗褐色土　砂利を多量に含む
4　暗黄褐色土　小豆色粒子を多量に含み、砂を少量含む　粘性あり
5　暗褐色土　砂利を多量に含む
6　暗褐色土　焼土、小礫を少量含む
7　暗茶褐色土　焼土を多量に含み、暗黄褐色土を少量含む　粘性あり
8　暗茶褐色土　焼土、炭を少量含み、白色粒子を多量に含む　粘性あり
9　暗褐色土　砂利主体　焼土、炭を少量含む

3は、灰釉陶器の皿である。体部のみである。

4は、緑釉陶器の高台付椀である。体部破片である。

5は、須恵器（ＮＳ）の片口鉢である。

6・7は、土師器の甕である。胴部下位以下が欠損している。

8は、須恵器（ＨＳ）の長頸壺である。胴部中位以上が欠損している。

9は、凝灰岩の切石である。

10から13は、鉄製品である。10は刀子刃部破片、11は延板状鉄製品、12・13は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第241号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第242号住居跡（第418図）

Ｒ・Ｓ－25グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・井戸・土壙など比較的密集していた。覆土第２層は、硬く締まった遺構構築層と類似した土のため、当初は、非常に浅い住居跡と判断したが、第２号カマドの調査中に、焼土が、第２層の下へ続いたため掘り込みの深い住居跡が確認できた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.75ｍ・短辺2.85ｍ・深さ0.47ｍであった。

主軸方位は、Ｎ－87°－Ｅであった。

カマドは、東壁に二基検出した。覆土の状況から第２号カマドから第１号カマドへと造り替えたと判断した。

第１号カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。袖から燃焼部の大部分が、カマドの造り替え時に破壊され、検出できなかった。燃焼部から煙道部へは、段をもたず急な傾斜で移行していた。

第２号カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は検出できなかったが、燃焼部の位置から、住居跡内に延びていたと判断した。燃焼部は、円形に浅く掘り込み、奥に向かって緩やかに傾斜していた。燃焼部から煙道部へは、段をもたず急な傾斜で移行していた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

覆土の下層から床面にかけては、鍛冶関連の廃棄物である羽口片や鉄滓のほか、大形の川原石が多量に出土した（平面図中に図示）。また、住居跡の中央から鉄製品（６）が出土した。

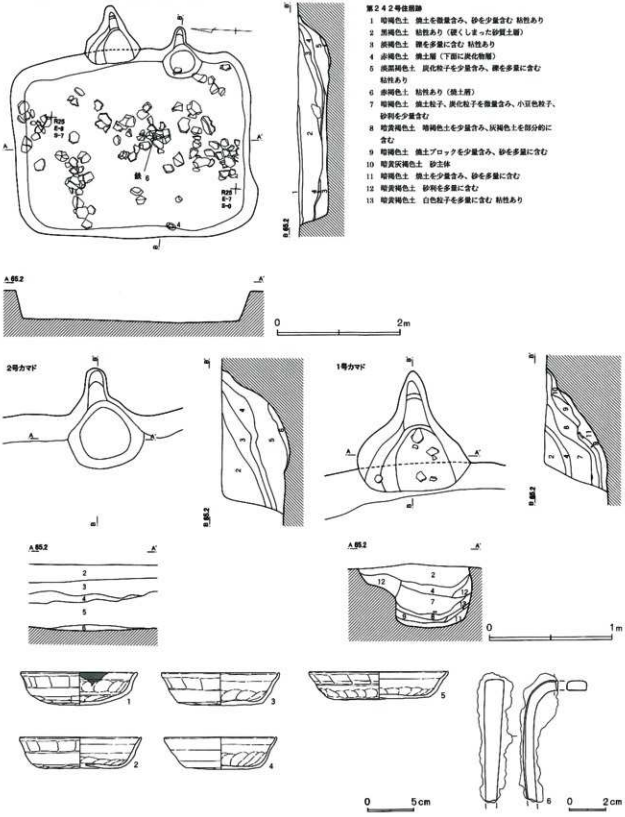
第358表　第241号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.8	3.3		7.0	B, D, H	普通		浅黄橙	40	
2	高台付椀	NS	14.2	5.5		5.6	B, H	普通		灰白	25	
3	皿	K	13.1				B	良好		灰白	10	
4	高台付椀	M					B	普通		淡緑	5	
5	片口鉢	NS	18.7	7.9		7.0	C	普通		灰白	50	
6	甕 B Ⅲ b	H	17.8				B, E	良好		橙	10	
7	台付甕	H	11.9				B, E	良好		浅黄橙	25	
8	長頸壺	HS				8.6	B, C, H	普通		外－灰黄。内－にぶい橙	40	カマド

第359表　第242号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.5		6.5	B, E, H	不良		黄橙	70	
2	坏 A Ⅳ	H	12.8	3.3		8.5	B, E, H	普通		淡橙	50	
3	坏 A Ⅳ	H	12.4	3.5		9.0	B, D, E, H	普通		暗茶褐	70	
4	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.4		7.9	B, D, E, H	普通		淡黄褐	90	
5	皿	H	14.7	3.0		10.2	B, D, E, H	普通		黄橙	90	

第418図　第242号住居跡・出土遺物

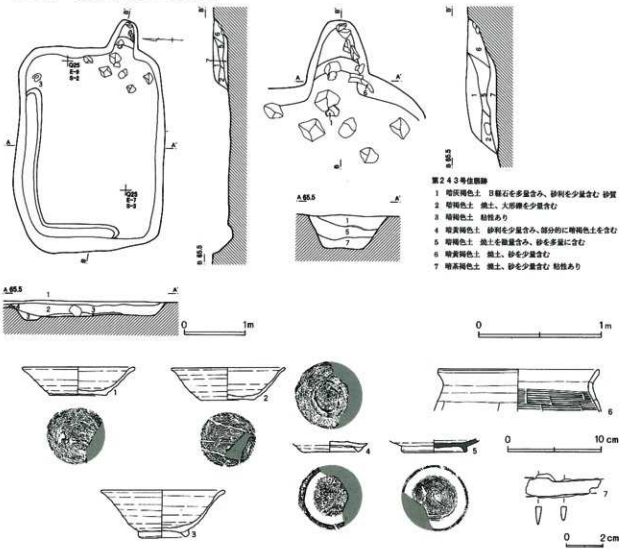


1から4は、土師器の坏ANである。5は、土師器の皿である。2は底部が欠損している。1は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

6は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物から第242号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第419図　第243号住居跡・出土遺物



第360表　第243号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	11.7	3.0		6.0	E, G	良好	R	橙	50	カマド
2	椀	HS	11.9	3.4		5.6	B, C, E, H	良好		にぶい橙		底－100。他－20
3	高台付椀	NS	12.9	5.0		4.5	B, F, H	普通		灰白	90	Q－25
4	高台付椀	NS				5.9	B, G, H	普通	R	灰白	60	
5	高台付皿	K				6.4	B, D	良好		淡灰白	20	
6	甕AⅢb	H	16.9				B, E, H	良好		にぶい橙	15	カマド

第243号住居跡（第419図）

Q－25グリッドで確認した。周辺の遺構は、住居跡・土壙・掘立柱建物跡など比較的密集していた。また砂利層が確認面であったため確認作業に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.24ｍ・短辺2.30ｍ・深さ0.26ｍであった。北壁から西壁にかけては、幅0.32ｍの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－94°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から住居跡内に延びていたと推定した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。燃焼部から煙道部へは段をもたず、緩やかに傾斜しつつ移行していた。燃焼部周辺から川原石がまとまって出土した。構築材と推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

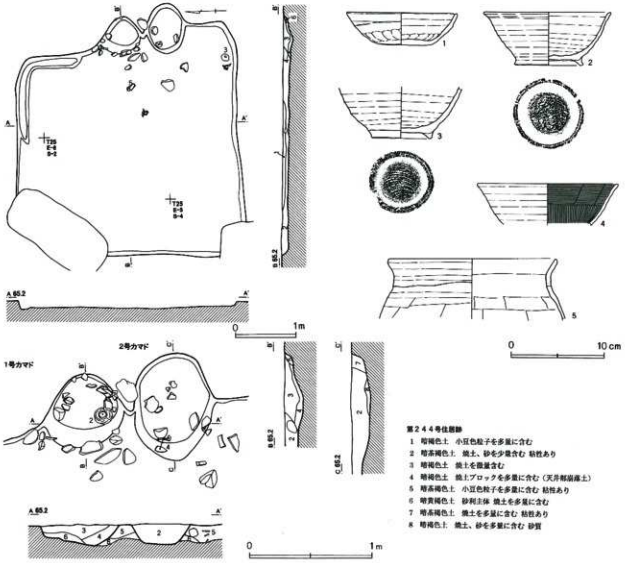
遺物は、カマド内から須恵器の坏（1）、土師器の甕（6）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の椀である。3・4は、須恵器（NS）の高台付椀である。4は底部のみである。

5は、灰釉陶器の高台付皿である。底部のみである。

6は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損して

第420図　第244号住居跡・出土遺物



いる。

7は、鉄製品の刀子である。

以上、出土遺物から第243号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第244号住居跡（第420図）

T－25グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していた。また砂利層が確認面のため確認作業は困難であった。

住居跡の北西隅は、攪乱で破壊され、南西隅は、第245号住居跡に破壊されていたが、ほぼ全容を検出した。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.69ｍ・短辺3.52ｍ・深さ0.10ｍと浅かった。住居跡の北東隅に、幅0.27ｍの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－89°－Eであった。

カマドは、東壁に並んで二基検出した。残存状況が悪く、不明な点が多かったが、第1号カマドから第2号カマドへの造り替えと判断した。

第1号カマドは、東壁の中央に造られた。左袖は、検出できなかった。第2号カマドと共有する右袖は、暗茶褐色土で造り付けられていた。燃焼部は、円形に浅く掘り込んでいた。

第2号カマドは、第1号カマドの南側に接して造られた。袖は、暗茶褐色土で造り付けられた。燃焼部は、楕円形に浅く掘り込まれていた。

遺構の切り合い関係は、第245号住居跡より古かった。

遺物は、第1号カマド内から須恵器の高台付椀（2）が、第2号カマド内から黒色土器（4）が、住居跡の南東隅から須恵器の高台付椀（3）が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。2は、高台付椀である。2は須恵器（HS）、3は須恵器（NS）である。3は口縁部が欠損している。

4は、黒色土器の高台付椀である。底部が欠損している。

5は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第244号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第245号住居跡（第421図・第422図・第423図）

T－25グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していた。また砂利層が確認面であったことと、覆土中に大形の川原石を多量に混入していたため、調査に困難を極めた。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.70ｍ・短辺3.16ｍ・深さ0.55ｍであった。

主軸方位は、N－92°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から短く住居跡内に延びていたと推定した。燃焼部は、楕円形にやや深く掘り込まれていた。燃焼部の奥壁は急な傾斜で立ち上がり、煙道部は小さな段をもって移行していた。

貯蔵穴は、カマドの右側で検出した。形状は、楕円形で規模は、長径0.54ｍ・短径0.49ｍ・深さ0.08ｍであった。

遺構の切り合い関係は、第244号住居跡より新しか

第361表　第244号住居跡出土遺物観察表

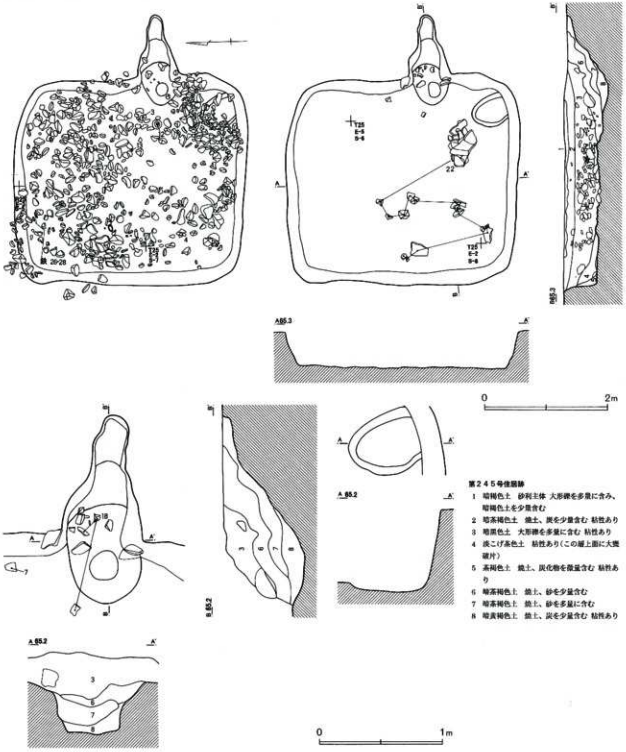
番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.6	3.9		5.7	B, E, H	普通		暗橙	70	
2	高台付椀	HS	13.3	5.6		6.8	B, C, E, G	良好	R	にぶい黄橙	75	カマド
3	高台付椀	NS				6.0	B, G	良好	R	灰白	70	
4	高台付椀	黒色	14.8				B, G	良好	R	外－浅黄橙。内－黒褐	25	カマド
5	甕 B Ⅲ a	H	17.8				B, C, E, H	普通		橙	20	

った。

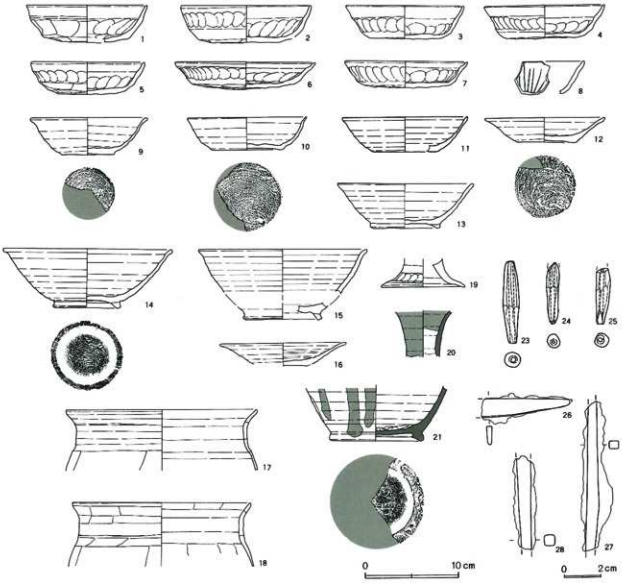
遺物は、カマド内から土師器の甕（18）が出土し、カマド前面から土師器の坏（3）、須恵器の皿（12）、住居跡の北西隅から鉄製品（26・28）が出土した。また、住居跡の南側の床面に須恵器の大甕（22）の破片が散乱した状態で出土した。

1・5は、土師器の坏AⅡである。2から4は、坏AⅣである。6・7は、土師器の皿である。8は、土

第421図　第245号住居跡



第422図　第245号住居跡出土遺物（1）



師器の暗文土器である。1は底部が欠損している。8は口縁部破片である。

9から11は、椀である。9・10は、須恵器（HS）である。11は、須恵器（NS）である。12は、須恵器（NS）の皿である。13から15は、高台付椀である。13は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。16は、須恵器（NS）の高台付皿である。11は底部、15は体部下位、16は高台が欠損している。

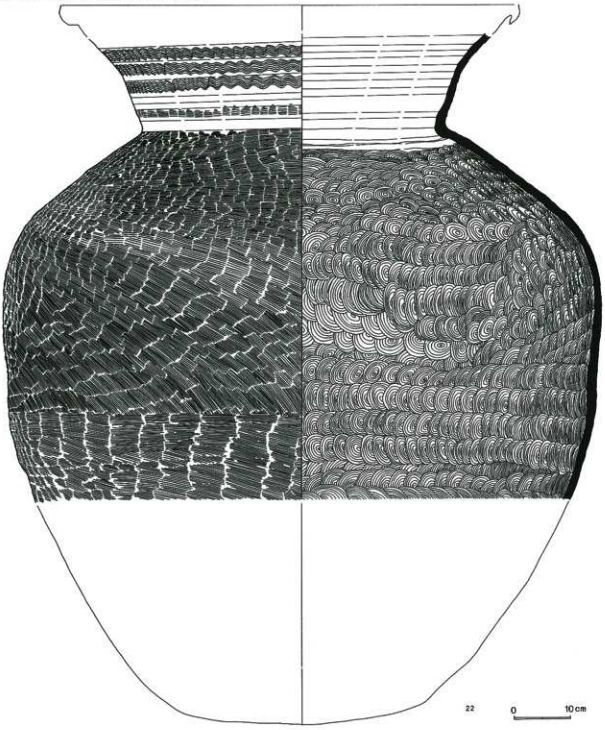
17から19は、土師器の甕である。17・18は胴部中位以下が欠損している。19は脚部のみである。

20・21は、灰釉陶器の長頸壺である。20は頸部のみ、21は底部のみである。

第362表　第245号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置
23	橙	100	4.4	0.9	0.2	2.2	C 3	Ⅰa	652	
24	にぶい褐	80		1.7	0.2	1.6	C 3	Ⅱa	653	
25	褐灰	70		0.7	0.2	1.3	C 3	Ⅱb	654	

第423図　第245号住居跡出土遺物（2）



22は、須恵器（S）の大甕である。口縁部と胴部下位以下が欠損している。

23から25は、土錘である。

26から28は、鉄製品である。26は刀子の茎部、27・28は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第245号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第246号住居跡（第424図・第425図）

T・U－24・25グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していた。また砂利層が確認面のため確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、北西隅のやや張る不正方形であった。規模は、長辺3.86m・短辺3.10m・深さ0.35mであった。

主軸方位は、N－108°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、検出できず、当初から造らなかったと判断した。焚き口部から燃焼部にかけては、不正楕円形にやや深く掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第676号土壙より新しかった。

遺物は、カマド右脇から須恵器の坏（2）、土師器の甕（8）、須恵器の壺（11）が出土し、住居跡の中央から土師器の甕（6）が出土した。

1は、須恵器（S）の椀である。2は、須恵器（NS）の椀である。3・4は、須恵器（S）の高台付椀である。1は底部、4は口縁部が欠損している。

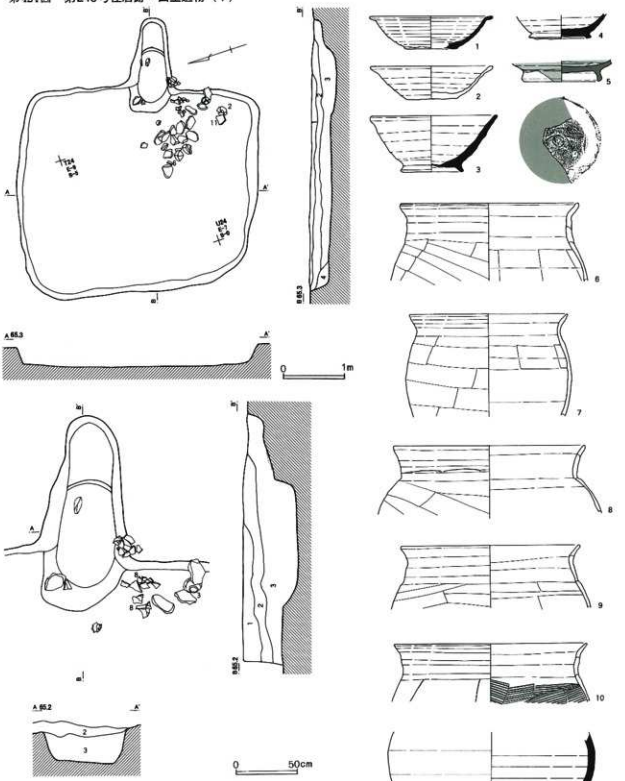
5は、灰釉陶器の高台付椀である。底部のみである。

6から10は、土師器の甕である。6・8から10は胴部下位以下、7は胴部中位以下が欠損している。

第363表　第245号住居跡出土遺物観察表

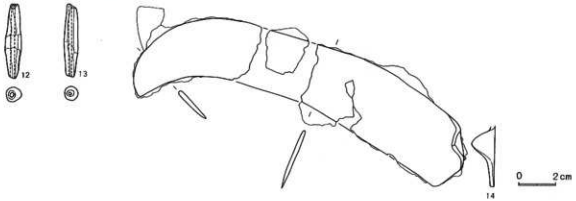
番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	釉薬	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅱ	H	12.8	4.0		8.9	B, D, E	普通		淡橙	50	
2	坏 A Ⅳ	H	13.8	3.9		7.5	B, E, H	普通		橙	60	ベルト
3	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.5		7.5	B, D, E, H	普通		淡橙	100	
4	坏 A Ⅳ	H	12.6	3.5		8.0	B, E, H	普通		橙白	80	
5	坏 A Ⅱ	H	12.0	3.4		6.1	B, E, H	普通		淡橙	40	
6	皿	H	14.8	2.9		8.0	B, D, E, H	普通		淡橙	90	
7	皿	H	13.0	2.8		9.0	B, E, H	普通		橙	30	カマド
8	坏（暗文）	H					B, E	普通		淡橙	10	
9	椀	H S	12.2	3.9		5.5	B	良好	R	内－にぶい褐。外－褐灰	50	
10	椀	H S	12.7	3.4		7.4	B, C, I	普通	R	内－灰白。外－褐灰	70	
11	椀	N S	13.2	3.6		6.7	B, G, H	普通		灰白	20	
12	皿	N S	12.5	2.6		6.2	B, C	良好	R	灰白	100	
13	高台付椀	N S	14.2	4.8		6.8	C, H	普通		灰白	25	
14	高台付椀	H S	17.7	6.3		6.6	B, C, G	普通		浅黄橙		ベルト
15	高台付椀	H S	17.8	7.5		7.7	B, C	良好	R	内－にぶい橙。外－褐灰	30	
16	高台付皿	N S	13.2				B, C, G	良好		灰褐色粒子	20	
17	甕 B Ⅲ a	H	20.3				B, E, H	良好		にぶい橙	25	
18	甕 B Ⅲ a	H	18.8				B, C, G	普通		橙	30	カマド
19	台付甕	H				8.7	B, H	良好		橙	25	
20	長頸壺	K					B, D	良好		淡灰白	10	
21	長頸壺	K				9.4	B, D	良好		灰白	10	
22	大甕	S	80.0	123.6				やや不良		灰白	30	

第424図　第246号住居跡・出土遺物（1）



第246号住居跡
1　黒褐色土　B軽石を少量含む 粘性あり
2　黒茶色土 粘土、炭化物を微量含む 粘性あり
3　茶褐色土　粘土、炭化物を少量含む 砂質 粘性あり
4　褐色土　炭化粒子を多量に含む 粘性あり

第425図　第246号住居跡出土遺物（2）



11は、須恵器（S）の甕である。胴部上位以上と底部が欠損している。

12・13は、土錘である。

14は、鉄製品の鎌である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第246号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第247号住居跡（第426図・第427図）

U－24グリッドで確認した。第4号土壙群調査中に、カマド燃焼部と似た焼土層を確認したため、周辺を精査したところ、方形のプランを確認できたので、住居跡と判断し調査を行った。

住居跡の形状は、長辺3.25m・短辺2.96m・深さ0.35mであった。住居跡の中央に長径2.13m・深さ0.15mの不正楕円形の土壙を検出し、住居跡の北西隅に径0.55m・深さ0.13mの小穴を検出した。

主軸方位は、N－115°－Eであった。

カマドは、東壁の南東寄りに検出した。焚き口部は、住居跡の中央に開いている。燃焼部は、楕円形に浅く掘り込まれていた。

第4号土壙群との切り合い関係は、明確に把握できなかった。しかし、断面観察から第4土壙群より新し

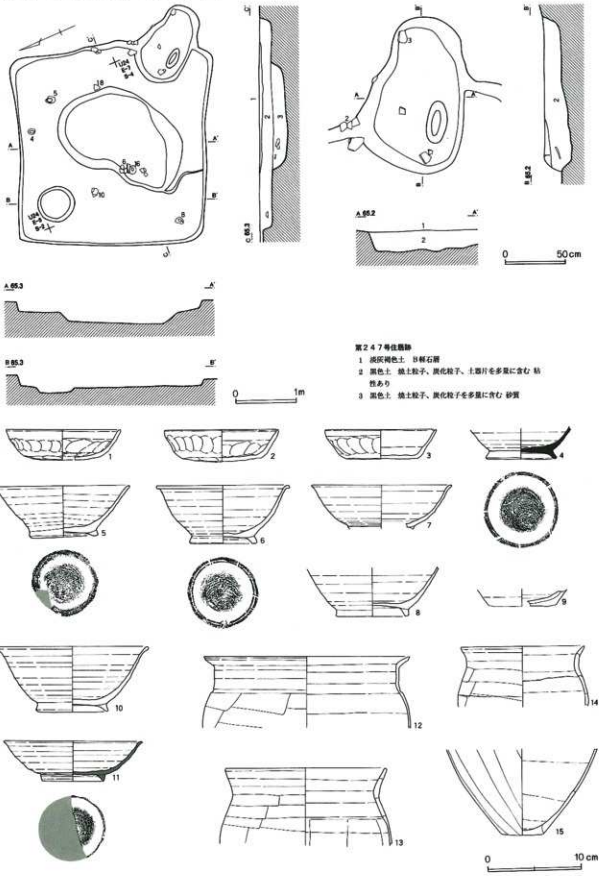
第364表　第246号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鐙	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	椀	S	12.9	3.5		5.3	B	良好	R	灰	40	
2	椀	NS	12.8	3.5		5.4	B, E	良好	R	灰白	100	
3	高台付椀	S	13.3	5.9		6.1	B, D	良好	R	灰	100	
4	高台付椀	S				5.5	B, C	良好	R	褐灰	20	
5	高台付椀	K				8.0	B	良好	R	灰白	10	
6	甕 B Ⅲ b	H	18.8				B, E, H	良好		橙	30	
7	甕 A Ⅱ c	H	16.8				B, D	普通		橙	15	カマド
8	甕 A Ⅱ b	H	20.3				B, C, E, H	良好		橙	20	カマド
9	甕 B Ⅲ a	H	18.9				B, E, H	良好		橙	20	
10	甕 B Ⅲ c	H	20.4				B, C, H	普通		橙	30	
11	短頸壺	S				11.0	B	良好		灰	20	

第365表　第246号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	褐灰	100	4.0	0.8	0.3	2.0	C 2	Ⅰb	478	
13	にぶい橙	100	3.9	0.7	0.2	1.9	C 2	Ⅰb	479	

第426図　第247号住居跡・出土遺物（1）



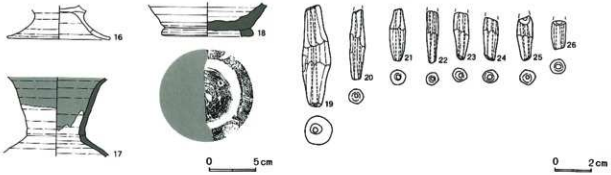
第247号住居跡

1　淡灰褐色土　白軽石層

2　黒色土　焼土粒子、炭化粒子、土器片を多量に含む　粘性あり

3　黒色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む　砂質

第427図　第247号住居跡出土遺物（2）



第366表　第247号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸線	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.0	3.2		6.8	B, E, H	普通		黄橙	30	カマド
2	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.4		8.0	B, E, H	普通		黄褐	60	カマド
3	坏 A Ⅳ	H	11.7	3.1		7.5	B, E, H	普通		黄褐	40	
4	高台付椀	S				7.0	B, E	良好	R	青灰	100	
5	高台付椀	N S	14.3	5.4		6.8	B, C, H	普通	R	灰白		底部－100% 他－60
6	高台付椀	H S	13.9	6.2		6.8	B, C	良好	R	橙		底部－100% 他－20
7	高台付椀	H S	14.7				B, E, H	普通		黒	30	カマド
8	高台付椀	H S				7.2	C, F, G, K	普通	R	浅黄橙	80	
9	高台付椀	N S					B, H	普通	R	灰白	15	カマド
10	高台付椀	H S	15.9	6.9		7.3	B, C, G	普通		浅黄橙	40	
11	高台付椀	K	14.4	4.3		6.4	B, D	良好	R	灰白	25	
12	甕 B Ⅲ b	H	21.7				B, C, E	良好		浅黄橙	20	
13	甕 A Ⅲ b	H	17.0				B, C, E	普通		浅黄橙	15	
14	台付甕	H	13.0				B, C	普通		橙	10	
15	甕底部	H				4.3	C, H	良好		橙	60	
16	台付甕	H				10.6	B, C, E	良好		橙	100	
17	長頸壺	K					D	良好		暗灰褐	10	
18	長頸壺	K				8.9	B	良好	R	灰白	5	

第367表　第247号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
19	にぶい橙	100	5.3	1.5	0.3	10.0	C 2	Ⅰa	480	
20	灰褐	90		1.8	0.2	1.6	C 3	Ⅰb	655	
21	にぶい橙	100	2.8	0.8	0.3	1.4	C 2	Ⅰa	481	
22	灰褐	50		0.7	0.3	0.9	C 3	Ⅱb	656	
23	明赤褐	50		0.8	0.2	1.2	C 2	Ⅱb	482	
24	にぶい橙	50		0.8	0.3	1.0	C 2	Ⅱb	483	
25	にぶい橙	60		0.8	0.2	1.2	C 2	Ⅲa	484	
26	橙	30		0.9	0.3	0.7	C 3	Ⅳa	657	

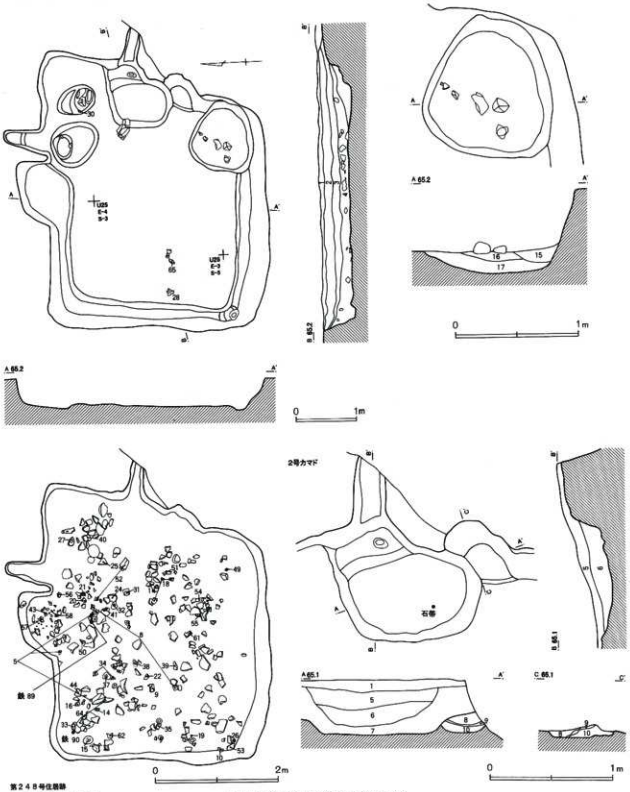
いと判断した。

遺物は、カマド内から土師器の坏（2・3）、住居跡の中央の土壙内から須恵器の高台付椀（6）、土師器の台付甕（16）が、住居跡の北東隅から須恵器の高台付椀（4・5）が出土した。

1から3は、土師器の坏AⅣである。1は底部が欠損している。

4から10は、高台付椀である。4は須恵器（S）、5・9は、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）である。4・9は底部のみである。7は底部、8

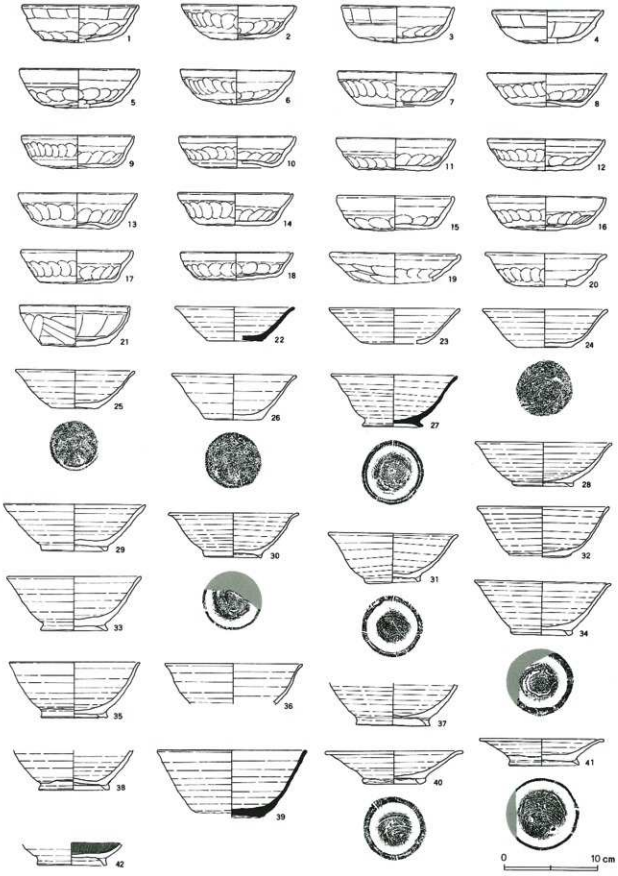
第428図　第248号住居跡



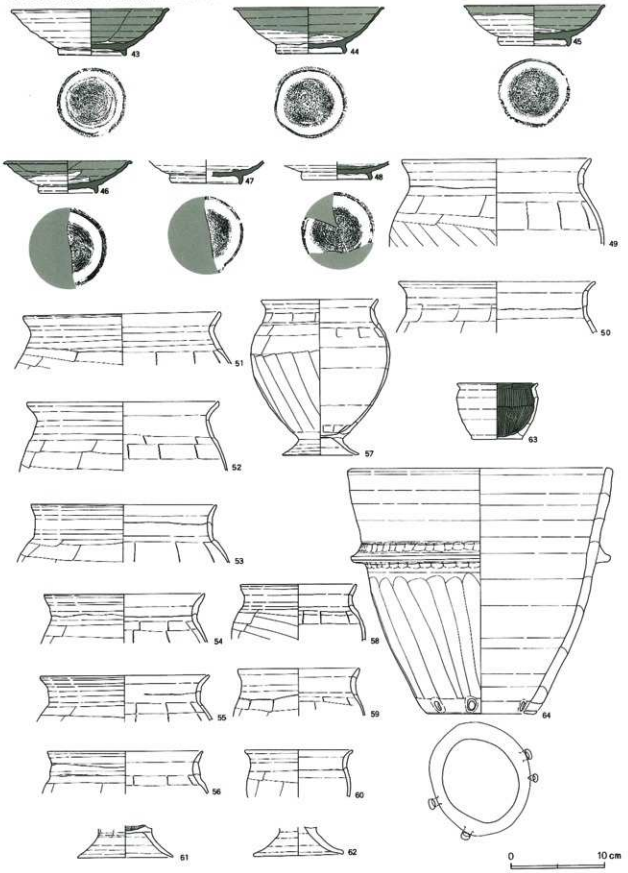
第248号住居跡

1　暗黒褐色土　※軽石層
2　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり
3　褐色土　焼土、炭化物を少量含み、土器片を多量に含む 粘性あり
4　赤褐色土　焼土、炭化物、土器片を多量含む 粘性あり
5　暗赤褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
6　暗黄茶褐色土　焼土を多量に含み、炭化物を少量含む
7　暗黄褐色土　小豆色粒子を多量に含み、砂を少量含む（地形隆起土）
8　暗褐色土　焼土、炭を少量含む 砂質
9　暗黄褐色土　小豆色粒子を多量に含む（掘り前）
10　暗黄褐色土　焼土、炭化粒子を微量含む
11　暗褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり
12　暗黄褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
13　赤褐色土　焼土主体
14　黒褐色土　焼土を少量含み、炭化物を多量に含む
15　暗黄褐色土　焼土、小豆色粒子を少量含む 粘性あり
16　暗黄褐色土　小豆色粒子を含み、白色粒子を多量に含む 粘性なし
17　暗黄褐色土　小豆色粒子を多量に含み、砂利を少量含む

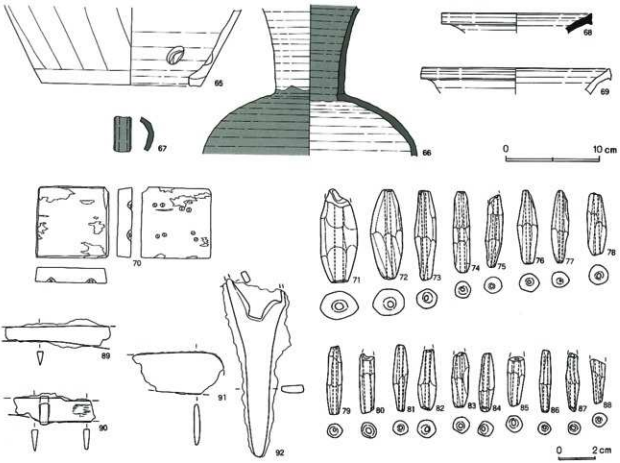
第429図　第248号住居跡出土遺物（1）



第430図　第248号住居跡出土遺物（2）



第431図　第248号住居跡出土遺物（3）



は口縁部が欠損している。

11は、灰釉陶器の高台付椀である。

12から16は、土師器の甕である。12から14は胴部中位以下、15は胴部中位以上が欠損している。16は脚部のみである。

17・18は、灰釉陶器の長頸壺である。17は胴部中位以下が欠損している。18は底部のみである。

19から26は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第247号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第248号住居跡（第428図・第429図・第430図・第431図）

U－25グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していた。当初は、重複した二軒の住居と考えたが、土層断面の観察からは、切り合い関係は認められず、一軒の住居跡と判断した。

住居跡の形状は、1号カマドが張り出した正長方形であった。規模は、長辺4.27m・短辺3.49m・深さ0.48mであった。南壁から北壁中央にかけては、幅0.45mの壁溝を検出した。

第2号カマドを基準とした主軸方位は、N－96°－Eであった。

二基のカマドを検出した。覆土の状況から、二基のカマドとも、住居埋没まで共用していたと判断した。

第1号カマドは、北壁のやや東寄りに造られた。左袖は、地山を掘り残して造り、短く住居跡内に延びて

第368表　第248号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.3	4.0		7.3	B, E, H, K	普通		橙	70	
2	坏 A Ⅵ	H	12.2	3.7		6.0	B, E, H	普通		淡橙	60	
3	坏 A Ⅳ	H	11.9	4.0		8.2	B, C, E, H	不良		淡黄橙	40	
4	坏 A Ⅳ	H	11.7	3.5		5.1	B, D, H, K	普通		黄褐	30	
5	坏 A Ⅱ	H	12.6	4.2		7.3	B, H, K	不良		赤橙	80	
6	坏 A Ⅳ	H	12.1	3.7		7.6	B, D, E, H	普通		淡黄褐	100	
7	坏 A Ⅵ	H	12.5	3.8		7.2	B, D, E, H	普通		黄橙	90	
8	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.5		7.0	B, D, H	普通		淡黄褐	50	
9	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.5		8.0	B, D, E	普通		淡明赤褐	40	
10	坏 A Ⅵ	H	12.2	3.4		7.6	B, D, E, H	普通		暗橙	40	
11	坏 A Ⅳ	H	12.5	3.4		7.6	B, D, E, H	普通		淡橙	80	
12	坏 A Ⅳ	H	12.3	3.3		7.8	B, D, E, H	普通		淡橙	50	床直
13	坏 A Ⅵ	H	12.6	3.7		6.9	B, E, H	普通		淡橙	60	
14	坏 A Ⅵ	H	12.2	3.4		7.5	B, D, E, H	普通		淡黄土	30	
15	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.7		8.2	B, E, H	普通		淡橙	100	砂
16	坏 A Ⅴ	H	12.4	3.7		7.5	B, D, H	普通		淡橙白	60	
17	坏 A Ⅳ	H	11.7	3.5		8.0	B, D, H	普通		淡橙	40	
18	坏 A Ⅳ	H	11.9	3.0		8.1	B, E, H	普通		淡黄土	80	
19	坏 B Ⅱ	H	13.7	3.2		8.5	B, E, H, K	普通		橙	20	
20	坏 B	H	12.8	3.5		6.1	B, D, E, H	普通		淡橙	20	
21	坏 B Ⅱ	H	11.6	4.4		7.1	B, D, E, H	良好		淡橙白	90	
22	椀	S	12.4	3.6		5.9	B, D	良好	R	灰	40	
23	椀	H	13.8	3.8		6.0	B, C, E	良好	R	にぶい橙	10	
24	椀	H S	12.8	4.1		5.8	B, E, G	良好	R	にぶい黄橙	70	
25	椀	H S	12.5	4.1		5.0	B, E, G	普通	R	浅黄	70	
26	椀	N S	13.0	4.8		6.1	B, C, G	普通	R	灰白	50	
27	高台付椀	S	13.3	5.5		6.0	B	良好	R	灰	90	
28	高台付椀	N S	14.3	4.7		5.8	B, E, I	良好	R	灰白	40	
29	高台付椀	N S	15.0	5.0		6.6	B, E, G	良好	R	灰白	50	床直
30	高台付椀	H S	13.5	4.2		5.9	B, E, G, I	良好	R	にぶい黄橙	60	
31	高台付椀	N S	13.5	5.2		5.2	B, E, G	良好	R	灰白	75	
32	高台付椀	H S	13.7				B, C	普通	R	橙	60	
33	高台付椀	N S	14.3	5.7		6.7	B, E, I	良好	R	灰白	50	
34	高台付椀	N S	14.3	5.6		5.7	B, E	普通	R	灰白	50	
35	高台付椀	N S	13.8	5.9		6.8	B, D, G	良好	R	黄灰	40	
36	高台付椀	H S	14.5				B, E, G	良好	R	にぶい橙	25	床直
37	高台付椀	N S				7.8	B	良好	R	灰	30	
38	高台付椀	H S				7.3	B, G, I	普通	R	灰黄	30	
39	高台付椀	S	15.5				B	良好	R	灰	30	
40	高台付皿	H S	14.3	3.5		5.3	B, E, I	良好	R	にぶい褐	60	
41	高台付皿	H S	12.9	2.9		7.3	B, C, E, I	普通	R	浅黄橙	90	
42	高台付椀	黒色				7.0	B, E	良好	R	内－黒褐。外－にぶい橙	5	
43	高台付椀	K	16.3	4.9		7.0	B	良好	R	灰	70	
44	高台付椀	K	15.7	4.9		7.0	B, D	良好		暗灰白	70	
45	高台付椀	K	14.7	4.3		7.2	B, D	良好		淡灰白	70	
46	高台付皿	K	13.1	3.4		5.9	B	良好		淡灰	40	
47	高台付皿	K				7.4	D	良好		淡灰白	20	
48	高台付皿	K				7.1	B	良好		淡灰白	20	
49	甕 B Ⅲ b	H	20.0				B, C, H	普通		浅黄橙	30	
50	甕 B Ⅲ b	H	20.6				B, C	普通		橙	20	
51	甕 B Ⅲ a	H	20.8				B, E, H	普通		橙	25	
52	甕 B Ⅲ a	H	20.3				B, E, H	普通		橙	70	

第369表　第248号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
53	甕 B Ⅱ b	H	19.6				B, E, H	良好		橙	15	
54	甕 A Ⅲ c	H	17.0				B, E, H	良好		にぶい橙	10	
55	甕 B Ⅱ c	H	17.8				B, E, H	良好		にぶい橙	15	
56	甕 B Ⅲ a	H	16.4				B, E	良好		にぶい橙	25	
57	台付甕	H	12.1	16.6		8.0	B, C, E	良好		にぶい橙	40	
58	台付甕	H	12.1				B, E, H	良好		橙	40	
59	台付甕	H	12.7				B, C, E, H	普通		にぶい橙	10	
60	台付甕	H	11.3				B, D, E	普通		橙	15	
61	台付甕	H				10.0	B, E, H	良好		橙	90	
62	台付甕	H				9.4	B, E	良好		橙	60	
63	ロクロ甕	黒色	8.4	5.9		5.2	B, E	良好		にぶい橙	60	
64	甑 B Ⅰ	H S	26.9	26.0		11.0	C, F, G, H	普通		灰白。浅黄橙	80	
65	甑	H S				16.9	B, C, H	普通		灰黄	20	
66	長頸瓶	K					B	良好		淡灰白	30	
67	手付長頸瓶	K					B, D	良好		淡灰白	10	把手のみ
68	長頸瓶	S	15.8				B	良好	R	灰	5	
69	長頸瓶	H	19.7				B, I	普通	R	橙	5	

いた。これに対応して右袖も造り付けたと推定した。

焚き口部の前面には、楕円形の浅い掘り込みがあった。燃焼部から煙道部へは、小さな段をもって移行していた。

第2号カマドは、東壁のやや北寄りに造られていた。暗黄褐色土で袖や燃焼部の底面を造っていた。燃焼部は、不正楕円形にやや深く掘り込み、底面に小さな凹凸がみられた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は、細長いと推定したが、調査区外に延びたため、全長は不明である。

貯蔵穴は、1号カマドの右脇と、2号カマドの右側に二カ所検出した。第1号貯蔵穴は、楕円形で規模は、長径0.63m・深さ0.08mであった。第2号貯蔵穴は、不正円形で規模は、長径1.15m・短径1.04m・深さ0.16mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、覆土内や床面から多量に出土した。カマド内からは、目立った遺物の出土がみられなかった。第1号貯蔵穴から須恵器の高台付椀（30）、第1号カマドの左脇の張り出し部から灰釉陶器の高台付椀（43）、土師器の台付甕（57）、土師器の甕（58）が出土した。また土師質の甑（64）は、住居跡の北西隅付近から出土した。石製の巡方（70）が第2号カマドの燃焼部の底面から出土した。

1から21は、土師器の坏である。5は、坏AⅡである。2・7・8・10・13・14は、坏AⅥである。16は、坏AⅤである。19から21は、坏Bである。ほかは、坏AⅣである。1・4・5・7・10・19・20は底部が欠損している。

22から26は、椀である。22は須恵器（S）、23は須恵器（H）、24・25は須恵器（HS）、26は須恵器（NS）である。27から42は、高台付椀である。27・39は須恵器（S）、30・32・36・38は、須恵器（HS）である。ほかは、須恵器（NS）である。40・41は、須恵器（HS）の高台付皿である。42は、黒色土器の高台付椀である。22・23・36は底部、32・39は高台、37・38は口縁部が欠損している。42は底部のみである。

43から45は、灰釉陶器の高台付椀である。46から48は、灰釉陶器の高台付皿である。47・48は口縁部が欠損している。

49から62は、土師器の甕である。49・52・58・60は胴部中位以下、50・51・53から56・59は胴部上位以下が欠損している。61・62は脚部のみである。

63は、黒色土器の甕である。

第370表　第248号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
71	褐灰	90		2.0	0.5	12.4	C 1	Ⅰb	196	
72	褐灰	100	4.6	1.7	0.4	10.0	C 1	Ⅰa	197	
73	橙	100	4.6	1.1	0.3	4.4	C 2	Ⅰa	485	
74	にぶい黄橙	100	4.2	0.8	0.2	2.9	C 2	Ⅰa	486	
75	褐灰	80		0.9	0.2	2.2	C 2	Ⅰb	487	
76	橙	90	3.8	1.1	0.2	2.6	C 2	Ⅰc	488	
77	褐灰	100	3.7	0.9	0.1	2.3	C 2	Ⅰb	489	
78	黄橙	100	3.2	1.0	0.2	2.9	C 2	Ⅰa	490	
79	浅黄橙	100	3.8	0.8	0.2	1.7	C 3	Ⅰb	658	
80	にぶい橙	60		0.8	0.3	1.9	C 3	Ⅱb	659	
81	黄橙	100	3.4	0.8	0.2	1.6	C 2	Ⅰa	491	
82	にぶい黄橙	80		0.9	0.2	2.2	C 2	Ⅰb	492	
83	黄橙	60		0.9	0.2	1.9	C 3	Ⅱa	660	
84	橙	100	2.8	0.8	0.2	1.5	C 3	Ⅰa	661	
85	にぶい橙	60		0.8	0.3	1.6	C 2	Ⅲa	493	
86	黄橙	100	3.3	0.7	0.2	1.3	C 3	Ⅰa	662	
87	浅黄橙	90		0.7	0.2	1.2	C 3	Ⅰb	663	
88	浅黄橙	40				1.0	C 2	Ⅲa	494	

第371表　第249号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.2		6.7	B, E, H	普通		淡橙	60	
2	坏 A Ⅳ	H	12.7	3.1		8.2	B, D, E	普通		淡橙	30	
3	坏 A Ⅳ	H	12.9	3.1		8.1	B, E, H	普通		淡橙	60	
4	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.6		8.2	B, C, E, H	普通		橙	80	
5	坏 A Ⅳ	H	12.2	3.6		8.0	B, E, H	普通		明橙	100	
6	椀	N S	12.7	3.6		6.1	B	普通	R	灰黄	50	
7	椀	N S	12.9	4.0		5.9	B	普通	R	黄灰	40	
8	椀	N S	12.6	4.0		6.4	B, F, G, K	良好	R	灰白	25	
9	高台付椀	H S	12.7	5.4		5.4	B, F, H, K	普通	やや不明瞭	灰黄	25	
10	高台付椀	N S	13.0	4.0		6.4	B, E, I	普通	R	灰オリーブ	70	
11	高台付椀	N S	14.0	5.0		7.2	B	普通	R	黄灰	60	
12	高台付椀	H S	14.4	5.7		7.6	B, G, I	良好	R	黄灰	70	
13	高台付椀	H S	14.5				B, C, K	普通	R	橙	25	
14	高台付椀	H S	14.2	5.5		6.8	B, C, E	良好	R	にぶい黄橙	60	
15	高台付椀	H S				6.5	C, F, G, H, K	普通	R	橙	80	
16	高台付椀	H S	14.3	5.1		5.9	B, G, I	良好	R	灰白	75	
17	高台付椀	K	12.4	4.4		5.6	B, D	良好		灰白	80	
18	甕 B Ⅱ a	H	24.6				B, D, E	良好		橙	30	
19	甕 B Ⅲ a	H	19.7				B, C, E	普通		橙	15	カマド2
20	甕 B Ⅱ b	H	15.7				B, D, E, H	普通		浅黄橙	10	
21	台付甕	H	11.7				B, E, H	良好		橙	75	
22	台付甕	H				8.5	B, E	良好		橙	25	
23	台付甕	H				8.6	B, D	普通		橙	20	
24	平瓶	K					D	良好		灰白	10	
25	甕	S	16.6				B	良好		青灰	10	
26	壺	S				13.6	B, F	良好		青灰	20	
27	長頸壺	S					B	良好		青灰	10	

64・65は、須恵器（ＨＳ）の甕である。65は底部のみである。

66は、灰釉陶器の長頸壺である。67は、灰釉陶器の手付瓶である。68は、須恵器（Ｓ）の長頸壺である。69は、須恵器（ＨＳ）の長頸壺である。66は口縁部と胴部中位以下が欠損している。67は把手のみ、68・69は口縁部のみである。

70は、石製腰帯具（石帯）の巡方である。

71から88は、土錘である。

89から92は、鉄製品である。89・90は刀子、91は延板状鉄製品、92は不明鉄製品である。

以上、出土遺物から第248号竪穴式住居跡を中堀Ｖ期に位置付けたい。

第249号住居跡（第432図・第433図）

Ｔ－25・26グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していた。また砂利層が確認面で、覆土に大形の川原石を多量に混入していたことから、調査に困難を極めた。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.14ｍ・短辺2.69ｍ・深さ0.19ｍであった。南壁から北西隅にかけては、幅0.3ｍの壁溝を検出した。

主軸方位は、Ｎ－80°－Ｅであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から住居跡内に延びていたと推定した。焚き口部から燃焼部にかけては、楕円形に浅く掘り込まれていた。

貯蔵穴は、カマドの右側で検出した。形状は、不正楕円形で規模は、長径0.75ｍ・短径0.57ｍ・深さ0.08ｍであった。

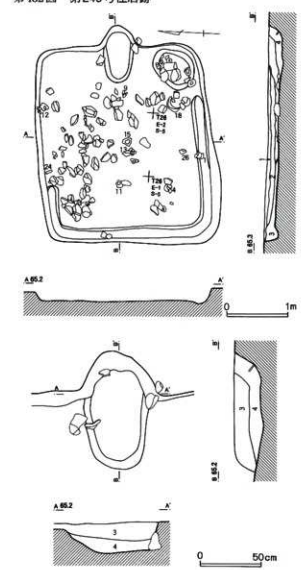
遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、貯蔵穴内から土師器の坏（３）、須恵器の坏（８）・高台付椀（14）・高台付片口椀（16）がまとまって出土した。また住居跡の床面から、多量の川原石とともに、須恵器の高台付椀（９・11・12・13・15）、土師器の甕（18）などが出土した。

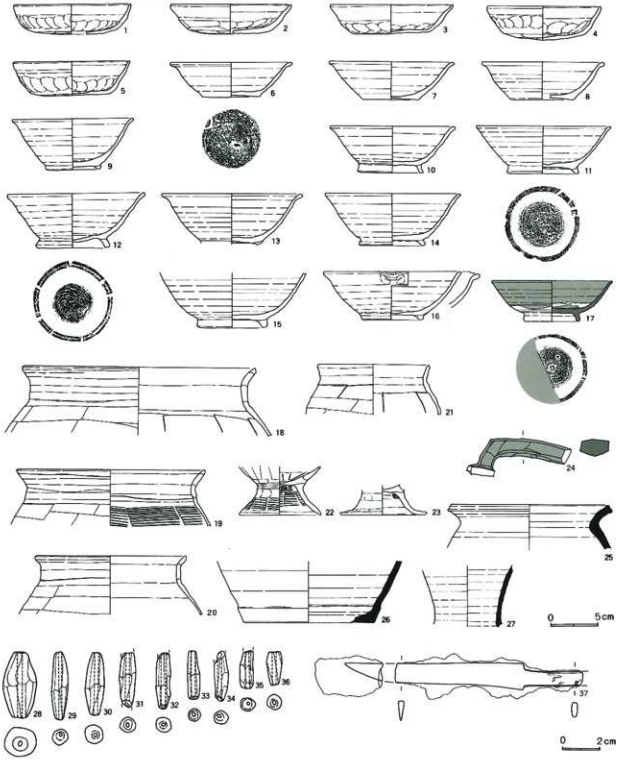
１から５は、土師器の坏である。１から４は坏ＡⅣ、５は坏ＡＶである。１・２は底部が欠損している。

６から８は、須恵器（ＮＳ）の椀である。９から16は、高台付椀である。10・11は、須恵器（ＮＳ）である。他は、須恵器（ＨＳ）である。８が底部、13は高台、15は口縁部が欠損している。

第432図　第249号住居跡



第433図　第249号住居跡出土遺物



17は、灰釉陶器の高台付椀である。

18から23は、土師器の甕である。18から21は胴部中位以下が欠損している。22・23は脚部のみである。

24は、灰釉陶器の平瓶である。把手のみである。

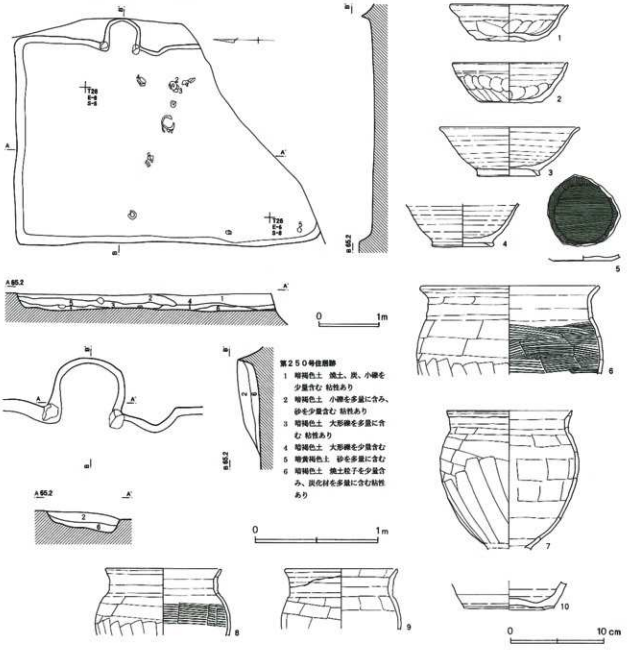
25から27は、須恵器（S）である。25は甕、26は壷、27は長頸壺である。25は口縁部のみ、26は底部のみ、27は頸部のみである。

28から36は、土錘である。

第372表　第249号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
28	にぶい橙	100	3.4	1.7	0.3	8.8	C 1	Ⅰa	198	
29	浅黄橙	100	3.7	0.9	0.2	2.0	C 2	Ⅰa	495	
30	橙	90	3.3	1.0	0.2	2.6	C 2	Ⅰb	496	
31	にぶい橙	60		0.8	0.2	1.8	C 2	Ⅱb	497	
32	浅黄橙	80		0.9	0.2	1.6	C 2	Ⅱa	498	
33	橙	100	2.5	0.7	0.2	0.8	C 3	Ⅰb	664	
34	橙	40		0.8	0.2	1.2	C 3	Ⅰc	665	
35	橙	60		0.8	0.2	0.9	C 3	Ⅰb	666	
36	浅黄橙	100	1.7	0.8	0.2	0.8	C 3	Ⅲa	667	

第434図　第250号住居跡・出土遺物



37は、鉄製品の刀子である。

以上、出土遺物から第249号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第250号住居跡（第434図）

T－26グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していた。また砂利層が確認面のため、確認作業は困難であった。

住居跡の南側が、調査区外のため、全容は不明であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.85m・短辺3.00m・深さ0.24mであった。

主軸方位は、N－90°－Eであった。

カマドは、東壁のやや北寄りに検出した。袖は、検出できず、当初から造らなかったと判断した。焚き口部の両側には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、住居跡の中央やや東寄りから、土師器の坏（2）、須恵器の高台付椀（3・4）が出土した。

1は、土師器の坏AⅡである。2は、坏Bである。

3は、須恵器（NS）の高台付椀である。4は、須恵器（HS）の高台付椀である。5は、黒色土器の椀である。4は口縁部が欠損している。5は底部のみである。

6から9は、土師器の甕である。6は胴部下位以下、7は底部、8・9は胴部中位以下が欠損している。

10は、須恵器（HS）の長頸瓶である。底部のみである。

以上、出土遺物から第250号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第251号住居跡（第435図）

U－25グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の東側が調査区外のため、規模やカマドなど不明な点が多かった。

住居跡の形状は、長方形と推定した。残存した西壁の長さは、2.76m・深さ0.28mであった。

主軸方位は、N－2°－Wと推定した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、土師器の坏AⅥである。底部が欠損している。

2は、灰釉陶器の高台付椀である。口縁部が欠損している。

3は、土師器の甕である。脚部のみである。

4・5は、土錘である。

以上、出土遺物から第251号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

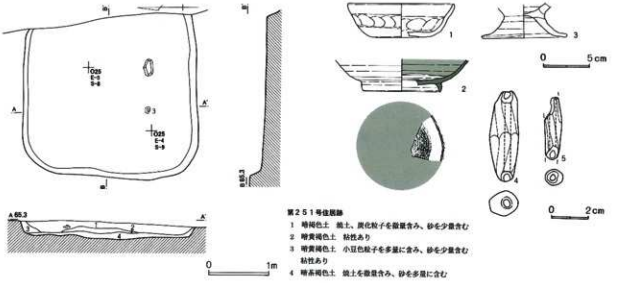
第252号住居跡（第436図・第437図）

V－24・25グリッドで確認した。周辺は、住居跡が

第373表　第250号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅱ	H	12.4	3.9		6.5	B, D, E	普通		暗灰褐	80	
2	坏 B	H	12.2	4.3		6.7	B, D, E	普通		黄橙	100	
3	高台付椀	NS	14.8	5.2		6.3	B, E, I	良好	R	灰白	90	
4	高台付椀	HS				5.9	B, E, I	良好	R	にぶい黄橙	60	
5	椀	黒色				6.1	B, E	普通		黄褐	10	底部のみ
6	甕 B Ⅲ b	H	18.9				B, C, E, H	良好		橙	25	
7	台付甕	H	13.3				B, D, E	良好		外－灰褐。内－にぶい橙	25	
8	台付甕	H	12.2				B, E	良好		にぶい橙	20	
9	台付甕	H	11.9				B, E	良好		にぶい橙	20	
10	長頸瓶	HS					B, D, I	良好	R	灰黄褐	5	

第435図　第251号住居跡・出土遺物



第374表　第251号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.2	3.6		6.2	B, E, H	不良		橙	30	
2	高台付椀	K				8.1	B, D	良好		灰白	20	
3	台付甕	H				8.6	C, H	普通		にぶい橙	60	

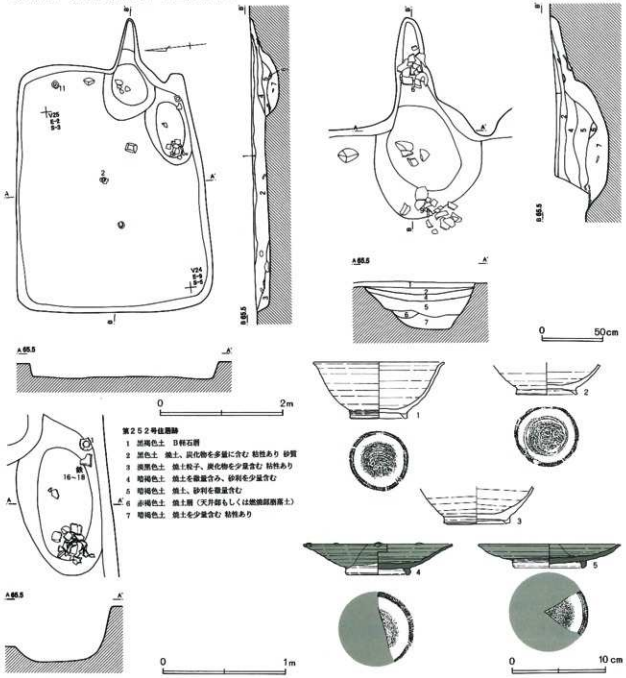
第375表　第251号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
4	にぶい橙	90		1.5	0.5	7.7	C 1	I c	199	
5	にぶい橙	40				1.8	C 2	V a	499	

第376表　第252号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	輪幅	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	N S	13.8	6.0		5.8	B, D	良好	R	灰白	40	
2	高台付椀	N S				6.3	B, D	良好	R	灰白	30	
3	高台付椀	N S				6.1	B, E, G	良好	R	黄灰	30	
4	輪花付段皿	K	15.7	3.3		6.2	B, D	良好	R	灰白	30	
5	高台付皿	K	14.7	2.5		7.1	B, D	良好	R	灰白	10	
6	甕 B Ⅲ a	H	19.5				B, C, E	良好		橙		口縁－100。胴－80。カマド
7	甕 B Ⅱ a	H	18.6				B, D	良好		にぶい橙		口縁－100。他－50
8	甕 A Ⅲ b	H	19.8				B, C, E	普通		浅黄橙	30	カマド
9	甕 A Ⅲ b	H	18.9				B, C, H	普通		橙	30	カマド
10	甕 A Ⅲ b	H	11.8				B, E	良好		にぶい橙	30	
11	台付甕	H				9.2	B, E	普通		にぶい橙	100	

第436図　第252号住居跡・出土遺物（1）



比較的密集し、また砂利層が確認面であったため、確認作業は困難であった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.00m・短辺3.20m・深さ0.25mであった。

主軸方位は、N－93°－Eであった。

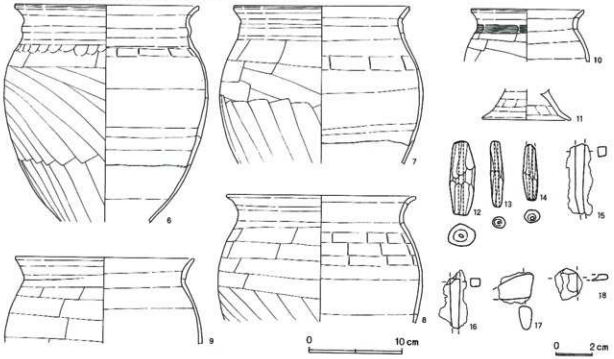
カマドは、東壁の南東寄りに検出した。袖は、検出できなかったが、燃焼部の位置から住居跡内に延びていたと推定した。燃焼部は、円形にやや深く掘り込まれていた。燃焼部から煙道部へは段をもって移行していた。煙道部は細長く、土師器の甕（6）を補強材として使用していた。

貯蔵穴は、カマド右脇で検出した。形状は、楕円形で規模は、長径1.26m・短径0.65m・深さ0.12mであった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド焚き口部から土師器の甕（9）、貯

第437図　第252号住居跡出土遺物（2）



蔵穴内から須恵器の高台付椀（1）、土師器の甕（7）、鉄釘（16・17・18）が出土し、住居跡の中央から須恵器の高台付椀（2）、住居跡の北東隅から土師器の台付甕（11）が出土した。

1から3は、須恵器（NS）の高台付椀である。2・3は口縁部が欠損している。

4は、灰釉陶器の輪花付段皿である。5は、灰釉陶器の高台付皿である。

6から11は、土師器の甕である。6は底部、7・8は胴部下位以下、9・10は胴部中位以下が欠損している。11は脚部のみである。

12から14は、土錘である。

15から18は、鉄製品である。15は釘、16は棒状鉄製品、17は延板状鉄製品、18は板状鉄製品の一部である。

以上、出土遺物から第252号竪穴式住居跡を中堀V期に位置付けたい。

第253号住居跡（第438図）

R－29・30グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していたが、他の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は、不正長方形であった。規模は、長辺3.89m・短辺2.90m・深さは0.11mと浅かった。

主軸方位は、N－97°－Eであった。

カマドは、北壁やや西寄りに検出した。残存状況が悪く、不明な点が多かった。袖は、検出できなかった。燃焼部は、不正円形に浅く窪んでいた。

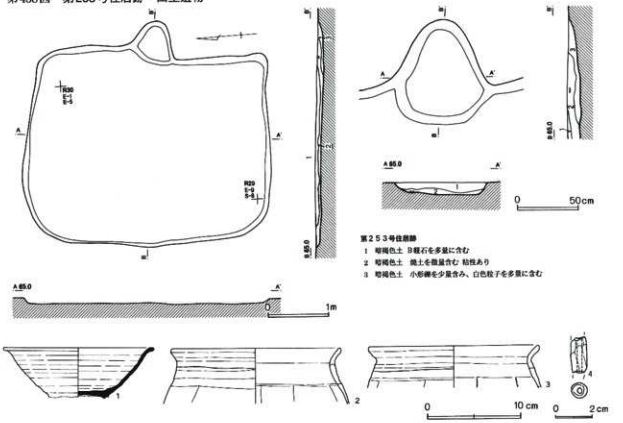
遺構の切り合いは、みられなかった。

1は、須恵器（S）の高台付椀である。高台が欠損

第377表　第252号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	橙	100	3.9	1.3	0.2	6.6	C 2	I a	500	
13	にぶい橙	100	3.5	0.7	0.1	1.0	C 3	I a	668	
14	にぶい黄橙	90		0.8	0.2	1.4	C 3	I b	669	

第438図　第253号住居跡・出土遺物



第378表　第253号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	調整	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	S	15.7				B	良好	R	灰	50	R－29
2	甕 B Ⅲ a	H	17.8				B, E	良好		橙	20	カマド
3	甕 B	H	17.9				B, E	良好		にぶい橙	20	

第379表　第253号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
4	黄橙	20				1.1	C 2	Ⅶ	501	

している。

2・3は、土師器の甕である。胴部上位が欠損している。

4は、土錘である。

以上、出土遺物から第253号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第254号住居跡（第439図）

R・S－29グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していたが、他の遺構は疎らであった。

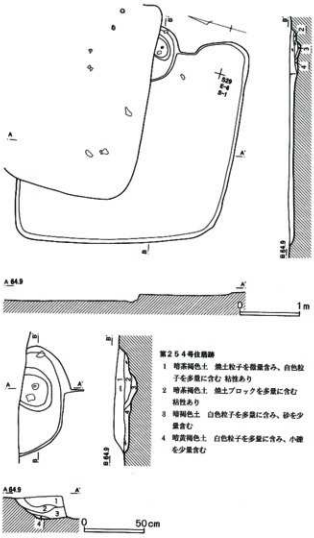
住居跡の北東部からカマドを第255号住居跡が破壊したため、不明な点が多かった。

住居跡の形状は、南東隅のやや張る長方形であった。規模は、長辺4.73m・短辺3.35m・深さ0.14mであった。

主軸方位は、N－80°－Eであった。

カマドは、東壁の中央で検出した。大半が、重複で破壊されていた。袖は、検出できなかった。焚き口部から燃焼部にかけては、浅く掘り込まれていた。燃焼部中央に円形の掘り込みがみられた。

第439図　第254号住居跡



遺構の切り合い関係は、第255号住居跡より古かった。

図示できるほどの遺物は、出土しなかった。

以上、遺構の重複関係から第254号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第255号住居跡（第440図）

R－29グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していたが、他の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.18m・短辺2.30m・深さ0.20mであった。北東隅から西壁中央にかけて幅0.2mの壁溝を検出した。

主軸方位は、N－3°－Eであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。焚き口部は、住居跡の中央方向に開いていた。袖は検出できず、当初から造らなかったと判断した。焚き口部右側には川原石が補強材として使用されていた。燃焼部の掘り込みは、みられなかった。燃焼部周辺から川原石が出土した。補強材であろう。

遺構の切り合い関係は、第254号住居跡より新しかった。

遺物は、住居跡の南西隅から須恵器の高台付椀（1）、住居跡の中央から刀子（4）、鑷子型金具（5）が出土した。

1・2は、須恵器（HS）の高台付椀である。1は口縁部が欠損している。2は底部のみである。

3は、土錘である。

4・5は、鉄製品である。4は刀子、5は鑷子形金具である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第255号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第256号住居跡（第441図）

S－29・30グリッドで確認した。周辺は、住居跡が比較的密集していたが、他の遺構は疎らであった。

南東隅は近代の溝で破壊されたが、ほぼ全容を知ることができた。

住居跡の形状は、不正方形であった。規模は、長辺3.00m・短辺2.85m・深さは0.10mと非常に浅かった。

主軸方位は、N－25°－Eであった。

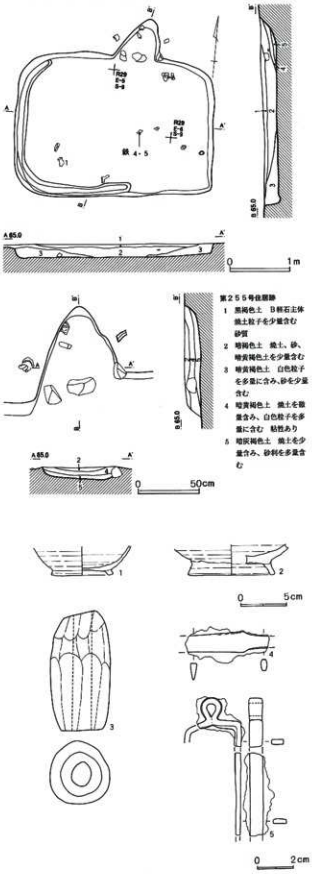
カマドは、北壁のやや西寄りに検出した。しかし、残存状態が悪く、構造は不明であった。袖は、検出できず、燃焼部の掘り込みもみられなかった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、カマド前面から土師器の坏（1）、須恵器の高台付椀（2）が出土した。

1は、土師器の坏AⅥである。底部が欠損している。

第440図　第255号住居跡・出土遺物



黒色の付着物が内面口縁部から底部にかけて確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

2は、須恵器（ＮＳ）の高台付椀である。3は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。3は高台が欠損している。

4は、灰釉陶器の輪花付段皿である。5は、灰釉陶器の高台付椀である。5は底部のみである。

6は、土師器の甕である。胴部上位以下が欠損している。

7は、鉄製品（不明）である。

以上、出土遺物から第256号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第257号住居跡（第442図）

Ｓ・Ｔ－30グリッドで確認した。周辺は、溝などの遺構がみられたが疎らであった。

住居跡の形状は、東壁の中央がやや張る不正長方形であった。規模は、長辺3.50ｍ・短辺2.54ｍ・深さ0.19ｍであった。

主軸方位は、Ｎ－30°－Ｅであった。

カマドは、北壁の中央で検出した。袖は検出できなかった。焚き口部の左側から川原石が出土した。補強材と判断した。燃焼部の掘り込みはみられず、カマドの覆土中には、ほとんど焼土が含まれなかった。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、住居跡の南壁の中央から土師器の坏（1）が出土した。

1は、土師器の坏ＡⅥである。

2は、灰釉陶器の高台付皿である。底部のみである。

3は、土師器の甕である。胴部中位以下が欠損している。

4・5は、土錘である。

以上、出土遺物から第257号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第380表　第255号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	H S				5.8	B, C, G	普通	R	橙	30	
2	高台付椀	H S				8.6	B, E, G, I	普通	R	灰白	5	

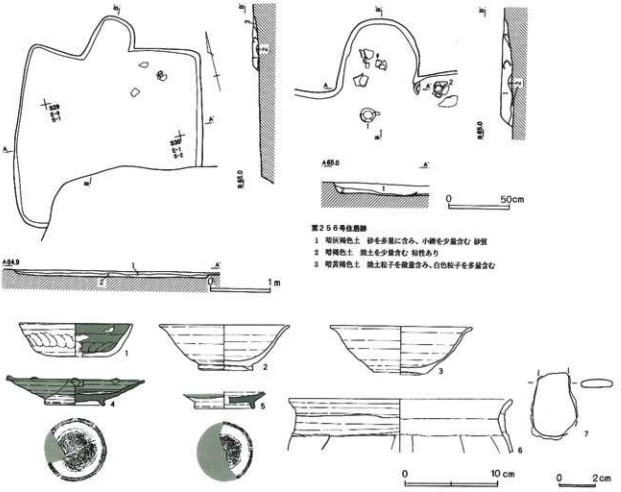
第381表　第255号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
3	にぶい黄橙	90	6.2	3.2	1.3	69.3	A 1	I b	18	

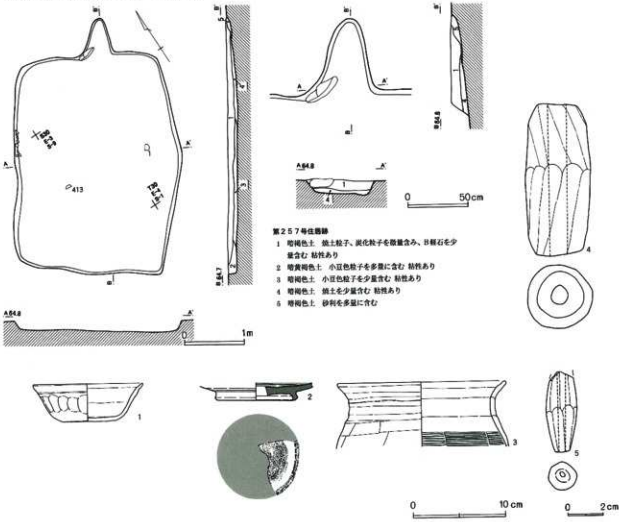
第382表　第256号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	脚	底径	胎土	焼成	軸輪	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	12.0	3.6		6.6	B, E, H	良好		橙	90	カマド
2	高台付椀	N S	13.7	4.9		5.4	B, E, G	良好	R	黄灰	60	カマド
3	高台付椀	H S	15.0				B, C	良好	R		50	
4	輪花付段皿	K	14.5	2.7		6.1	B, D	普通		灰	70	
5	高台付椀	K				6.2	B	良好		灰白	20	
6	甕 B Ⅲ a	H	23.7				B, E, H	良好		橙	15	

第441図　第256号住居跡・出土遺物



第442図　第257号住居跡・出土遺物



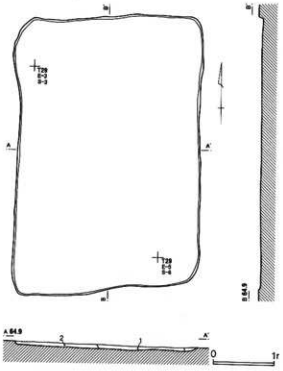
第383表　第257号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	繊維	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.7	4.0		5.7	B, E, G	普通		黄橙	60	
2	高台付皿	K				8.2	B	良好		暗灰白	20	カマド
3	甕 B Ⅲ a	H	17.8				B, E, G	良好		橙	15	

第384表　第257号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
4	橙	100	8.0	3.5	1.1	117.1	A 1	Ⅰa	19	
5	黄橙	70		1.6	0.3	9.1	C 1	Ⅱa	200	

第443図　第258号住居跡



第258号住居跡
1　暗褐色土　焼土粒子を微量含み、暗黄褐色土をブロック状に少量含み、砂を多量に含む　粘性あり
2　暗黄褐色土　砂を多量に含み、暗褐色土をブロック状に少量含む

第258号住居跡（第443図）

T－29グリッドで確認した。周辺は、溝などの遺構がみられたが硬らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.31m・短辺2.88m・深さ0.06mと非常に浅かった。

主軸方位は、N－1°－Eであった。

カマドは検出できず、床面上に痕跡も確認できなかったことから当初から造られていなかったと判断した。

遺構の切り合いは、みられなかった。

図示できるほどの遺物は、出土しなかった。

以上から第258号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

（2）掘立柱建物跡

中堀遺跡では、大小65棟の掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物跡は、北西部の一群（第1号から第27号掘立柱建物跡）、中央部の一群（第28号から第41号掘立柱建物跡）、南東部の一群（第42号から第65号掘立柱建物跡）の大きく三群に分布していた。北西部・南東部の群のみが大形の庇付き建物を含むが、中央部の一群は、中小規模の建物群である。南西部の第12号区画溝に囲まれた建物地業跡の周囲には、掘立柱建物跡を検出することはできなかった。

遺構確認面が、焼土粒子を含んだ遺物堆積層をはずした下面であることは、他の古代の遺構と同様である。ただし北西部と中央部の建物群は、比較的確認の容易な砂質粘土層の直上で確認できたのに対し、南東部の建物群は、砂利層の上面で確認した。

中堀遺跡の掘立柱建物跡の特色は、多数の竪穴式住居跡や他の遺構と近接していたことである。検出した建物は、柱穴や規模・形態に基づき、次のように分類することが可能である。

A　大形の掘り方で掘り込みの深い柱穴の建物

Ⅰ　2間×3間の身舎に四面庇が付く

第1・3・42・50・55・58号掘立柱建物跡

Ⅱ　2間×2間の身舎に四面庇が付く

第4号掘立柱建物跡

Ⅲ　2間×2間の身舎に三面庇が付く

第44・54号掘立柱建物跡

Ⅳ　2間×3間の身舎のみ

第51・53号掘立柱建物跡

Ⅴ　2間×4間の身舎のみ

第2号掘立柱建物跡

B　中規模の掘り方で掘り込みの深い柱穴の建物

第444図　掘立柱建物跡全体図

Ⅰ　2間×3間の身舎に四面庇が付く

第46号掘立柱建物跡

Ⅱ　2間×3間の身舎に一面庇が付く

第40・43・57・63号掘立柱建物跡

C　小規模の掘り方で掘り込みも浅い柱穴の建物

A・Bに含まれなかったほとんどの建物で、梁行きに庇を設けた建物もみられる。柱間や柱穴規模など不揃いであった。南東部の建物群は、発掘調査中に建物として確認できたが、北西部の一群は、建物として確認できたものは少なかった。

なお第47号掘立柱建物跡は、総柱建物である可能性があったが、南側が、砂利採集で破壊されたため全体形状の把握はやや難しかった。

一般に掘立柱建物跡からは、柱穴から出土する少量の遺物のみであることが多い。しかし中堀遺跡では、火災層の形成に伴い、掘立柱建物跡の屋内に存在した可能性の高い遺物が、旧地表の直上に堆積していた。また火災による廃棄物を、柱掘り方に埋め込んだ掘立柱建物跡も検出できた。前者は、第4・50号掘立柱建物跡であり、後者は、第54・55号掘立柱建物跡である。

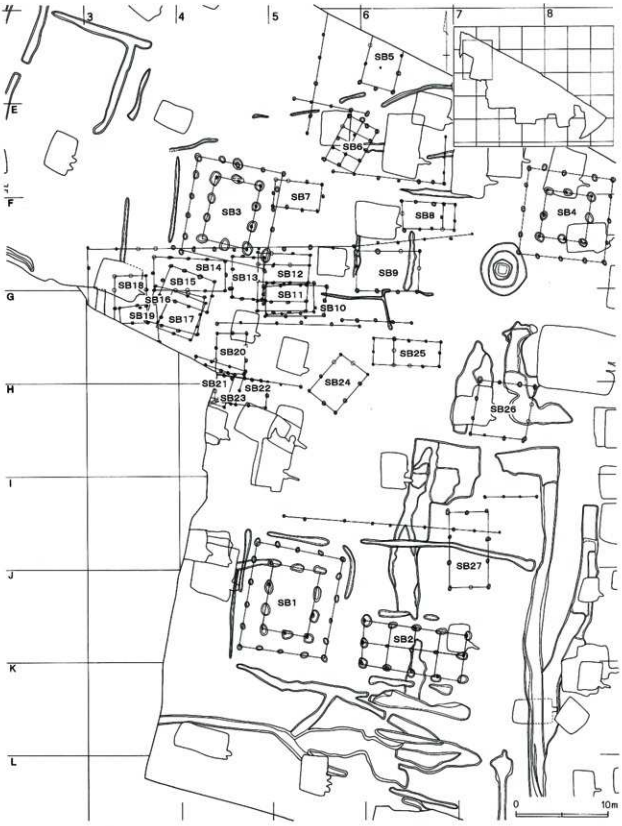
第4号掘立柱建物跡では、大量の土師器坏・須恵器高台付椀が出土し、墨書土器では多数の「南」が確認できた。また第50号掘立柱建物跡では、床面に設置した須恵器大甕や長頸壺などの貯蔵具が出土した。

一方、第54・55号掘立柱建物跡では、柱穴から大量の灰釉陶器が出土した。灰釉陶器には、高台付皿や高台付椀などの供膳具が多かった。この廃棄物層が、どの建物に伴うかは明らかにできなかったが、一連の火

第385表　掘立柱建物跡一覧表（1）

新番号	グリッド	柱間数（桁行×梁間）	全体の規模（桁行m×梁間m）	身舎の規模（桁行m×梁間m）	此	棟行方位	掘り方規模（長径m×短径m×深さm）			掘り方形状	掘り方規模（長径m×短径m×深さm）			掘り方形状
1	Ⅰ-4・5，J-4・5	3×2	11.4×9.41	7.28×5.12	4	N-8°-E	1.22	0.96	1.0	長方形	0.48	0.53	0.42	円形
2	J-6・7，K-6・7	4×2	11.32×4.86	8.48×4.86	1	N-80°-W	0.84	0.64	0.83	長方形	1.13	0.95	1.01	長方形
3	E-4・5，F-4・5	3×2	10.45×9.32	6.86×4.7	4	N-13°-E	1.24	1.07	1.22	正方形	0.88	0.58	0.39	円形
4	E-7・8，F-7・8	2×2	9.5×8.79	5.28×4.9	4	N-8°-E	0.92	0.95	0.6	円形	0.55	0.45	0.44	円形
5	D-5・6	3×2	4.05(5.88)×3.82	4.05(5.88)×3.82		N-13°-E	0.4	0.33	0.26	円形				
6	E-5・6	4×2	5.43×3.38	5.43×3.38		N-31°-E	0.42	0.35	0.34	円形				
7	E-5，F-5	3×2	4.94×3.00	4.94×3.00		N-84°-W	0.35	0.32	0.27	円形				
8	F-6・7	4×2	5.96×3.22	5.96×3.22		N-86°-W	0.35	0.31	0.29	円形				
9	F-5・6，G-6	3×2	3.39×2.18	3.39×2.18		N-88°-W	0.55	0.54	0.3	円形				
10	F-4・5，G-4・5	3×2	6.52×3.63	6.52×3.63		N-87°-W	0.41	0.41	0.26	円形				
11	F-4・5，G-4・5	3×2	5.43×3.02	5.43×3.02		N-87°-E	0.44	0.39	0.28	円形				
12	F-4・5，G-4・5	3×2	5.66×6.45	5.66×3.92	2	N-5°-E	0.38	0.27	0.27	円形	0.29	0.24	0.24	円形
13	F-4，G-4	3×3	4.47×3.50	4.47×3.50		N-4°-E	0.33	0.33	0.29	円形				
14	F-3・4，G-3・4	4×2	7.74×3.25	7.74×3.25		N-90°-W	0.34	0.27	0.21	円形				
15	F-3・4，G-3・4	3×2	5.04×3.36	5.04×3.36		N-70°-W	0.35	0.32	0.22	円形				
16	F-3，G-3・4	3×2	5.85×4.20	5.85×4.20		N-76°-W	0.35	0.35	0.36	円形				
17	F-3，G-3・4	3×2	4.32×3.94	4.32×3.94		N-22°-E	0.25	0.26	0.27	円形				
18	F-3，G-3	3×2	5.08×(3.48)	5.08×(3.48)		N-3°-W	0.3	0.33	0.28	円形				
19	G-3	2×2	4.15×3.98	4.15×3.98		N-5°-W	0.43	0.24	0.32	楕円				
20	G-4	3×2	4.49×3.27	4.49×3.27		N-3°-E	0.27	0.3	0.38	円形				
21	G-4，H-4	2×1	3.69×3.41	3.69×3.41		N-71°-W	0.34	0.31	0.28	円形				
22	G-4，H-4	2×2	3.83×2.78	3.83×2.78		N-83°-W	0.34	0.32	0.22	円形				
23	G-4，H-4	3×2	5.53×3.76	5.53×3.76		N-73°-W	0.3	0.27	0.25	円形				
24	G-5・6，H-5	3×2	5.38×3.75	5.38×3.75		N-40°-E	0.28	0.25	0.24	円形				
25	G-6	4×2	7.18×2.85	7.18×2.85		N-87°-W	0.33	0.26	0.25	円形				
26	G-7，H-7	3×3	6.01×5.93	6.01×5.93		N-11°-E	0.51	0.46	0.33	円形				
27	Ⅰ-6・7，J-6・7	3×2	8.05×4.23	8.05×4.23		N-1°-W	0.66	0.38	0.37	楕円				

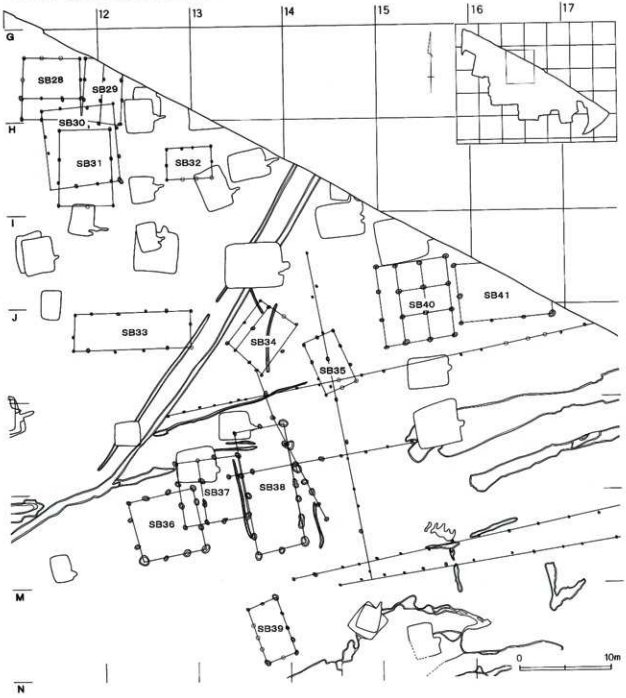
第445図　掘立柱建物跡詳細分布図（1）



第386表　掘立柱建物跡一覧表（2）

新番号	グリッド	柱間数（桁行×梁間）	全体の規模（桁行m×梁間m）	身舎の規模（桁行m×梁間m）	庇	棟行方位	掘り方規模（長径m×短径m×深さm）			掘り方形状	掘り方規模（長径m×短径m×深さm）			掘り方形状
28	G－11，H－11	3×2	6.41×6.62	6.41×4.35	1	N－89°－W	0.39			円　形	0.35			楕　円
29	G－11・12，H－11・12	3×2	6.59×4.16	6.59×4.16		N－4°－E	0.38	0.32	0.24	円　形				
30	G－11・12，H－11・12	3×3	8.32×7.87	8.32×7.87		N－5°－W	0.36	0.33	0.22	円　形				
31	H－11・12	3×1	8.1×5.93	8.1×5.93		N－1°－W	0.31	0.31	0.19	円　形				
32	H－12・13	4×2	4.81×3.24	4.81×3.24		N－86°－E	0.26	0.22	0.24	円　形				
33	J－11・12	5×2	12.36×3.88	12.36×3.88		N－88°－E	0.32	0.31	0.22	円　形				
34	J－13	3×1	5.56×3.05	5.56×3.05		N－51°－W	0.33	0.3	0.31	円　形				
35	J－14	3×2	5.97×3.82	5.97×3.82		N－22°－W	0.29	0.3	0.14	円　形				
36	L－12・13，M－12・13	3×3	7×6.63	7×6.63		N－10°－W	0.75	0.7	0.36	円　形				
37	K－12・13，L－12・13	3×3	6.91×6.96	6.91×6.96		N－7°－W	0.7	0.061	0.32	円　形				
38	K－13・14，L－13・14	6×2	13.3×5.53	13.3×5.53		N－10°－W	0.73	0.67	0.5	円　形				
39	M－13・14	4×2	3.13×1.69	6.25×3.37		N－20°－W	0.39	0.32	0.17	円　形				
40	I－14・15，J－15	3×3	8.6×7.4	8.6×5.3		N－7°－W	0.55	0.46	0.38	円　形	0.49	0.43	0.4	円　形
41	I－15・16，J－15・16	3×2	4.82×3.08	4.82×3.08		N－85°－E	0.26	0.52	0.19	円　形				
42	S－14・15，T－14・15	3×2	12.2×9.08	7.5×4.46	4	N－3°－W	0.89	0.74	0.61	長方形	0.59	0.56	0.52	円　形
43	P－16・17，Q－16・17	3×3	7.28×7.25	7.28×7.25		N－2°－E	0.91	0.6	0.63	長方形				
44	Q－16・17，R－16・17	3×2	10.4×8.97	6.48×4.73	3	N－5°－W	0.94	0.68	0.41	長方形	0.61	0.54	0.35	円　形
45	Q－17・18，R－17・18	3×2	9.82×4.74	7.42×4.74	1	N－3°－W	0.89	0.81	0.56	円　形	0.77	0.59	0.52	円　形
46	Q－18，R－17・18	3×2	10.54×7.84	6.75×4.78	4	N－6°－E	0.95	0.74	0.62	長方形	0.61	0.56	0.39	円　形
47	U－17，V－17	3×3	6.85×5.53	6.85×5.53		N－1°－W	0.82	0.65	0.41	円　形				
48	O－17・18，P－17・18	3×2	5.47×3.5	5.47×3.5		N－2°－E	0.47	0.47	0.34	円　形				
49	O－17・18，P－17・18	3×2	5.65×4.2	5.65×4.2		N－79°－W	0.69	0.6	0.39	円　形				
50	O－18・19，P－18・19	3×2	13.59×10.52	8.36×5.38	4	N－2°－W	1.48	1.21	1.06	長方形	0.74	0.64	0.52	円　形
51	O－19，P－19	3×2	7.24×4.8	7.24×4.8		N－80°－W	1.28	1.06	0.95	円　形				
52	O－19・20，P－19・20	3×2	6.1×4.74	6.1×4.74		N－87°－W	0.63	0.64	0.42	円　形				
53	Q－21，R21	3×2	7.2×4.82	7.2×4.82		N－3°－E	1.07	0.89	0.75	長方形				
54	M－20・21，N－20・21	2×2	9.54×7.67	5.28×4.82	3	N－3°－E	1.36	1.17	1.09	長方形	1.22	0.85	0.76	長方形
55	O－20・21，P－20・21	3×2	10.74×8.96	7.13×4.82	4	N－4°－E	1.3	1.09	1.08	円　形				
56	P－22，Q－21・22	2×2	5.12×3.64	5.12×3.64		N－17°－E	0.52	0.29	0.4	円　形				
57	Q－21・22，R－21・22	3×2	6.88×6.83	6.88×4.63	1	N－9°－E	0.88	0.83	0.88	長方形	0.97	0.71	0.87	円　形
58	R－21・22，S－21・22	3×2	10.2×7.55	7.94×5.2	4	N－4°－E	1.11	1.03	0.83	長方形				
59	O－24・25	2×2	5.32×3.89	5.32×3.89		N－85°－W	0.8	0.77	0.62	楕円形				
60	O－25・26，P－25	2×2	11.0×6.84	11.0×6.84		N－76°－E	0.34	0.33	0.52	円　形				
61	P－24・25，Q－24・25	3×2	11.06×7.71	11.06×7.71		N－87°－E	0.38	0.38	0.33	円　形				
62	P－23・24，Q－23・24	3×2	7.55×5.06	7.55×5.06		N－88°－W	0.56	0.62	0.29	円　形				
63	S－23・24，T－2324	3×2	6.85×6.51	6.85×4.24	1	N－3°－E	0.51	0.48	0.39	円　形	0.37	0.31	0.32	円　形
64	R－24・25，S－24・25	3×2	8.76×4.38	6.48×4.38	1	N－82°－E	0.49	0.42	0.54	円　形	0.36	0.33	0.42	円　形
65	P－26・27，Q－26・27	3×2	10.21×4.2	6.26×4.2	2	N－4°－W	0.85	0.74	0.59	円　形	0.54	0.5	0.47	円　形

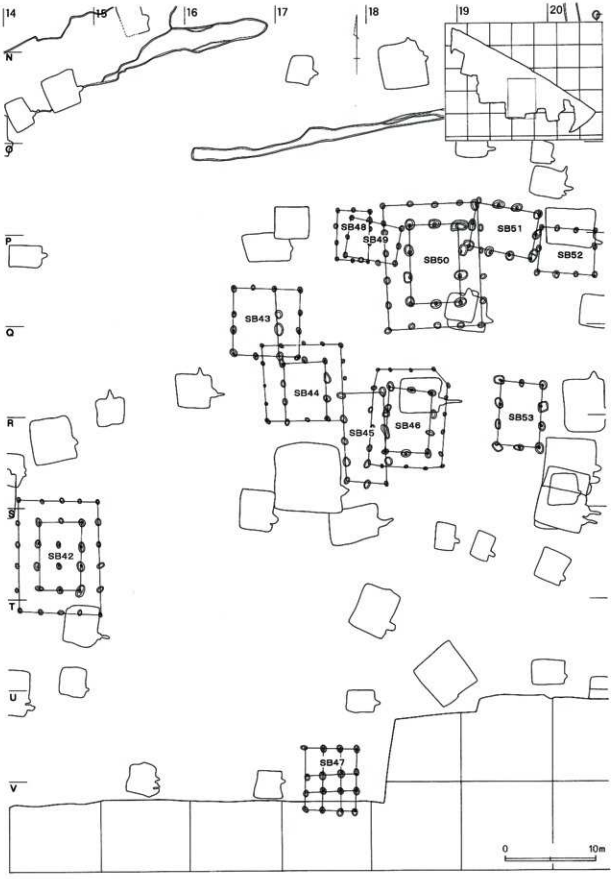
第446図　掘立柱建物跡詳細分布図（2）



災の形成に伴うと考えたい。

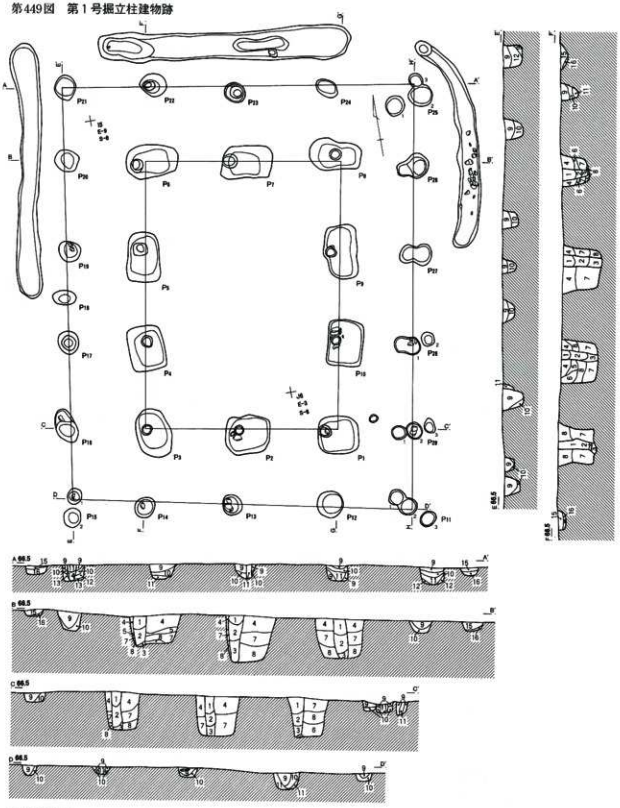
このほか第3号掘立柱建物跡の柱穴に接して、土壙状の掘り込みがみられ、建物構築の際の地鎮の可能性を推定した。

第447図　掘立柱建物跡詳細分布図（3）



第448図　掘立柱建物跡詳細分布図（4）

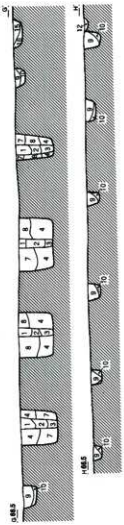
第449図　第１号掘立柱建物跡



第１号掘立柱建物跡

1　褐色土　炭化物を微量含む(柱痕)
2　褐色土　炭化物を多量に含む(柱根)
3　褐色土　焼土粒子、炭化粒子を多量に含む(柱根)
4　褐色土　小石、白色粒子を多量に含む
5　褐色土　小石、白色粒子を多量に含む　礎主体
6　褐色土　小石、白色粒子を多量に含み、礫を少量含む
7　暗褐色土　砂利を含む
8　褐色土　炭化物を少量含む
9　褐色土　白色粒子を多量に含む
10　暗褐色土　白色粒子を微量含む
11　褐色土
12　褐色土　白色粒子を少量含む
13　黒褐色土　白色粒子を微量含む
14　褐色土
15　黒褐色土　白色粒子、褐色粒子を含む
16　暗赤褐色土　小石状分を含む

0　4m



第１号掘立柱建物跡

（第449図）

Ｉ－４・５、Ｊ－４・５グリッドで確認された。遺構構築面の上に焼土と砂混じりの層が２から５㎝堆積し、さらにその上に浅間山Ｂ軽石層が薄く堆積していた。遺構の確認は、大変困難を極めたが、梁行き２間×桁行き３間の身舎の四面に庇のつく建物（三間四面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、長方形の掘りかたで、Ｐ１から時計回りに長軸が、東西（Ｐ１・２）－南北（Ｐ３・４・５）－東西（Ｐ６・７・８）－南北（Ｐ９・10）と設置されたようである。身舎の柱穴は、長径1.22ｍ×短径0.96ｍ×深さ1.0ｍと大形であった。これに比べ、四面を巡る庇の柱穴は、径50㎝前後と小規模であった。庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていたが、東面の庇柱のみ三本ずつ確認された。この柱穴は、庇部分の立て替えか、庇の床の沈降を止めるための措置（補助柱穴）であろう。他の庇柱が、このような造作を行っていないことから後者と考えられる。

身舎の柱痕跡は、遺構確認面からすでに確認でき、断面観察でも立ち腐れ状態で確認できた。柱掘方内に充填された土は、砂利混じりの土で、非常に堅く締められていた。これに比べ庇の柱痕跡は、わかりにくく、充填された土もそれほど硬く締められていなかった。

建物の北半分には、庇柱に沿って深さ10㎝前後の溝が巡っていた。北西部と北東部で途切れていた。溝底が、深くなる部分もあったが、柱痕跡などはみられなかった。雨落ち溝か垣根状の施設が考えられた。しかし前者は深すぎること、後者は柱痕跡が無いことなどから、積極的な遺構の性格付けは困難であった。

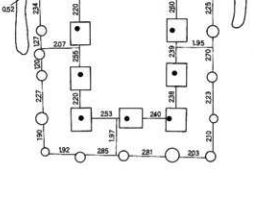
棟方向は、Ｎ－８°－Ｅを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも7.28ｍ×5.12ｍを測り、四面の庇を含めると11.4ｍ×9.41ｍとなる。柱心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いはほとんどみられず、わずかに第14号溝が、建物の北半分を巡る溝の一部とＰ６・20の上部を壊しているだけであった。

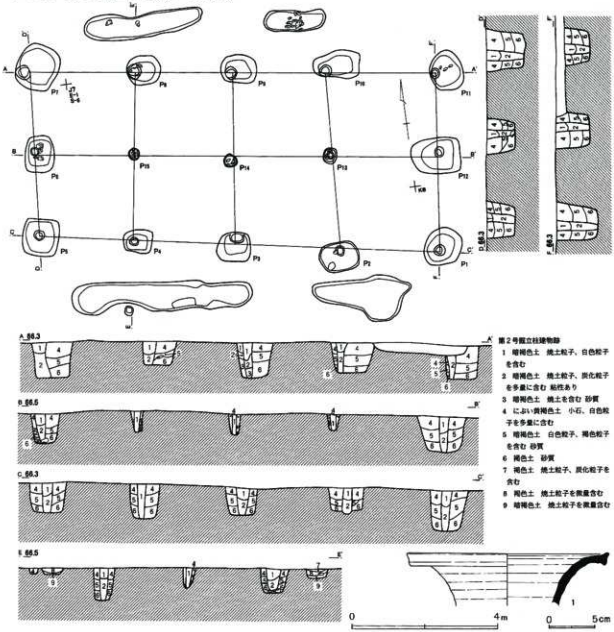
出土遺物は、柱穴や溝からわずかに土師器の破片が出土した。

第２号掘立柱建物跡（第450図）

Ｊ－６・７、Ｋ－６・７グリッドで確認された。第１号掘立柱建物跡同様、遺構構築面の上に焼土と砂混じりの層が２から５㎝堆積し、さらにその上に浅間山Ｂ軽石層が薄く堆積していた。北東隅部の遺構を破壊し、第43号竪穴式住居跡が構築されていたため、この竪穴式住居跡から調査に着手した。また第５号区画溝の堆積土が、第２号掘立柱建物跡の上を薄く覆っていた。遺構の確認は、大変困難であったが、梁行き２間×桁行き４間の建物（四三間屋）が検出された。側柱



第450図　第２号掘立柱建物跡・出土遺物



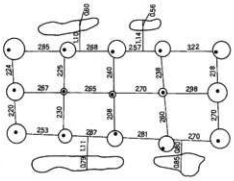
の建物であり、床束を伴う。

柱穴は、方形の掘りかたであった。長径0.84ｍ×短径0.64ｍ×深さ0.83ｍと大形であった。床束は、方形の掘り方で、径40cm×深さ60cmと小形ながら深かった。。床束は、棟に沿って三箇所確認できた。

柱痕跡は、側柱柱穴・床束柱穴とも遺構確認面から明瞭に確認でき、断面観察でも立ち腐れ状態が確認できた。側柱柱穴の掘方内に充填された土は、砂利混じりの土で、非常に堅く締められていた。また床束穴の掘り方内には、拳大の礫が、ぎっしり詰まっていた。

第387表　第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	大甕	S	21.0				B,D	普通				



建物の北側と南側には、第１号掘立柱建物跡同様、桁側の柱に沿い、0.5ｍ程度離れ深さ10cm前後の溝が巡っていた。中央部でやや途切れていた。入り口に関わるのだろうか。溝底が、深くなる部分もあったが、柱痕跡などはみられなかった。やはり雨落ち溝か垣根状の施設であろうか。

棟方向は、N－80°－Wを指していた。第２号掘立柱建物跡の規模は、11.32ｍ×4.86ｍを測り、身舎では、中堀遺跡最大の建物であった。柱心心間の距離は、図の通りである。

遺構の切り合いは、前にも挙げた第43号竪穴式住居跡と第５号区画溝が、第２号掘立柱建物跡を壊して構築されている。また第１号掘立柱建物跡と第２号掘立柱建物跡は、柱筋を揃えていることから、同時存在していた建物と考えられる。

出土遺物は、柱穴や溝からわずかに土師器の破片が出土し、また須恵器の甕（１）が１点北側の溝から出土した。

１は、須恵器の甕である。口縁部のみである。

第３号掘立柱建物跡（第451図）

E－４・５、F－４・５グリッドで確認された。遺構構築面の上に５cmほど薄く浅間山B軽石層が堆積していた。第２号掘立柱建物跡の周辺は、浅間山B軽石と砂礫の混成土を覆土とした中世の竪穴状遺構や小柱穴・土壙などが激しく切り合い、遺構の確認に大変困難を極めた。しかし身舎の大形柱穴や、第１号掘立柱建物跡と共通する柱の配置であったことが予測されたため、該当柱穴の摘出は、比較的容易であった。梁行き２間×桁行き３間の身舎の四面に庇のつく建物（三間四面屋）が検出された。

身舎の柱穴は、正方形の掘りかたで、柱掘り方の内側によって身舎の柱が設置されている。身舎の柱穴は、長径1.24ｍ×短径1.07ｍ×深さ1.22ｍと大形であった。これに比べ、四面を巡る庇の柱穴は、径60cm前後と小規模であった。庇の柱は、身舎の柱と対になるように柱通りを揃え掘られていたが、第１号掘立柱建物跡と比較すると不揃いであった。

身舎の柱痕跡は、遺構確認面からすでに確認でき、断面観察でも立ち腐れ状態を確認できた。柱最下部は、酸化鉄化していた。柱掘方内に充填された土は、砂利混じりの土で、非常に堅く締められていた。これに比べ庇の柱痕跡は、わかりにくく、充填された土もそれほど硬く締められていなかった。身舎・庇とも柱穴の規模や柱痕跡は、第１号掘立柱建物跡と共通していた。

棟方向は、N－13°－Eを指す南北棟であった。規模は、身舎だけでも6.86ｍ×4.77ｍを測り、四面の庇を含めると10.45ｍ×9.32ｍとなる。柱心心間の距離は、図の通りである。

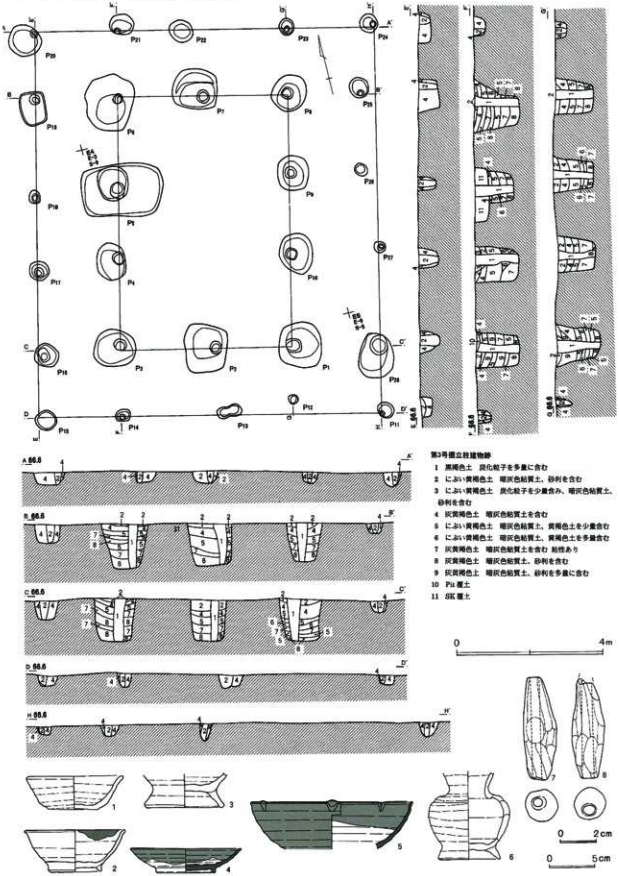
遺構の切り合いは激しく、中世の第　号竪穴状遺構にP18が壊され、第64・34号土壙にP24・28がそれぞれ壊されている。また身舎の柱穴P５を掘削、柱を据え掘り方内に土砂を充填した後（建物完成後か）、柱の周囲を30cm程度土壙状に掘り込み、そこに小形の台付長頸壺（６）を埋置していた。おそらく地鎮にかかる遺構であろう。

出土遺物は、柱穴や溝からわずかに土師器の破片が出土した。

１は、須恵器（NS）の椀である。２・３は、高台付椀である。２は、須恵器（NS）である。３は、須恵器（HS）である。３は底部のみである。２は黒色の付着物が口縁部内面に確認できる。煤の痕跡と考えられる。

４は、灰釉陶器の高台付椀である。５は、灰釉陶器の輪花付高台付椀である。５は底部が欠損している。

第451図　第３号掘立柱建物跡・出土遺物

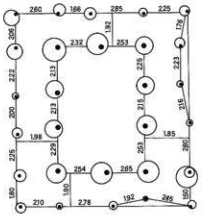


第388表　第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	軸釉	色調	残存	出土位置その他
1	椀	NS	11.0	4.5		5.5	B, C, E, G	良好		淡橙	100	P5
2	高台付椀	NS					B, D, E, H	普通		淡橙	20	P−10
3	高台付皿	K	11.9	2.6		6.1	B, D, E, H	良好		灰白	底部60 他5	P5
4	高台付椀	K	11.6	2.6		6.0	D, F	良好		やや濃灰やや緑	50	
5	脚花付高台付椀	K	17.5				D, F	良好		灰白	20	P5
6	台付長頸壺	NS				6.7	B, D	良好		淡橙	80	P5

第389表　第3号掘立柱建物跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
7	灰黄褐	100	15.3	1.8	0.5	13.3	C1	Ia	201	
8	にぶい赤褐	95		1.9	0.7	13.1	C1	Ic	202	



6は、須恵器（NS）の長頸壺である。口縁部が欠損している。

7・8は、土錘である。

第4号掘立柱建物跡（第452図）

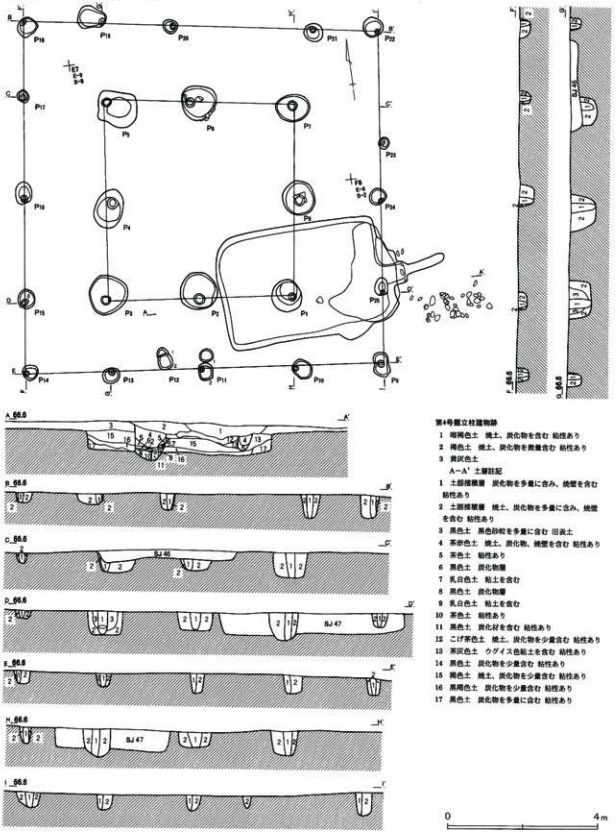
E−7・8、F−7・8グリッドで確認された。重機による表土掘削後の遺構確認作業中、E−8・F−8グリッドで、多量の焼土と炭化物に混じった、夥しい土器の堆積地点を確認した。この堆積物の上面には、5cmほど薄く浅間山B軽石層が堆積しており、土器の堆積地点の周辺部も、第4号掘立柱建物跡の柱穴確認面まで15cmほど、焼土と炭化物の砂質土が堆積していた。

そのため全く遺構の平面形が把握できず、小グリッドごとに西側から、浅間山B軽石層と焼土層を5cmずつで下げることとした。まず第46号竪穴式住居跡と47号竪穴式住居跡の西側一部が確認でき、E−8・F−8グリッドの夥しい土器の堆積は、竪穴式住居の廃棄後の埋没過程で、大量の土器が住居内に廃棄された結果と判断し、第46・47号住居跡の調査に着手した。

第46号住居跡の覆土中や貼り床面に第4号掘立柱建物跡の柱穴は全く確認できず、第4号掘立柱建物跡の存在は考えられなかったため、通常の竪穴式住居の調査を行った。ところが、F−8グリッドの小グリッドに東西に設定した土層観察のためのベルトを、第47号竪穴式住居跡の土層観察用に転用し、西から3mほど掘削したところ、第47号住居跡の床面を貫く大形の柱穴を確認した。この柱穴が、第4号掘立柱建物跡のP1となったのである。

土器・焼土・炭化物の堆積層とともに、第47号住居跡との関わりを土層断面で精査したところ、明らかに第47号住居跡→第4号掘立柱建物跡→土器堆積層と、土層が形成されたことがわかった。しかも第4号掘立柱建物跡の柱穴P1の炭化した柱痕跡の上部で、焼土と炭化物と混じり、その直上から土器の堆積層が始まっていた。さらに柱痕跡も東側に捻れて確認された。このことからこの土器の堆積層は、第4号掘立柱建物跡の火災の際に、建物の内部に収納されていた土器類が、建物の倒壊とともにP1から東に向かって転落して形成されたと判断した。

第452図　第４号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡

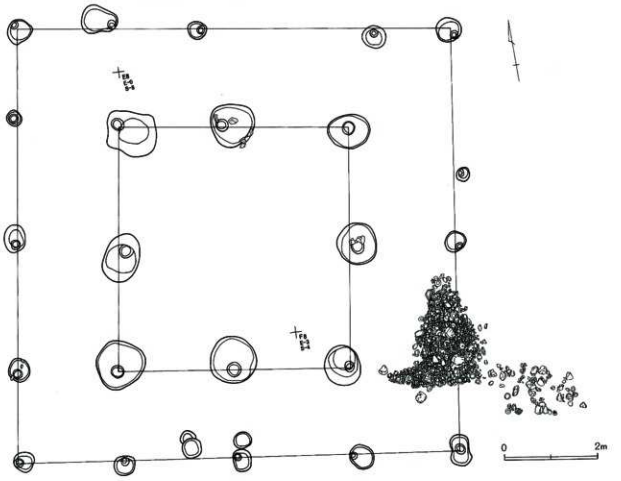
1　暗褐色土　焼土、炭化物を含む 粘性あり
2　褐色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり
3　黄灰色土

A–A' 土層註記

1　土器接構面　炭化物を多量に含み、焼壁を含む 粘性あり
2　土器接構面　焼土、炭化物を多量に含み、焼壁を含む 粘性あり
3　黒色土　黒色砂粒を多量に含む 旧表土
4　茶赤色土　焼土、炭化物、焼壁を含む 粘性あり
5　茶色土　粘性あり
6　黒色土　炭化物層
7　乳白色土　粘土を含む
8　黒色土　炭化物層
9　乳白色土　粘土を含む
10　茶色土　粘性あり
11　黒色土　炭化材を含む 粘性あり
12　こげ茶色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
13　茶灰色土　ウグイス色粘土を含む 粘性あり
14　黒色土　炭化物を少量含む 粘性あり
15　褐色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
16　黒褐色土　炭化物を少量含む 粘性あり
17　黒色土　炭化物を多量に含む 粘性あり

0　4m

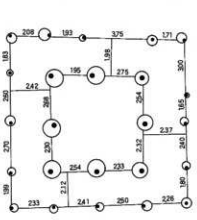
第453図　第４号掘立柱建物跡遺物出土状態（１）



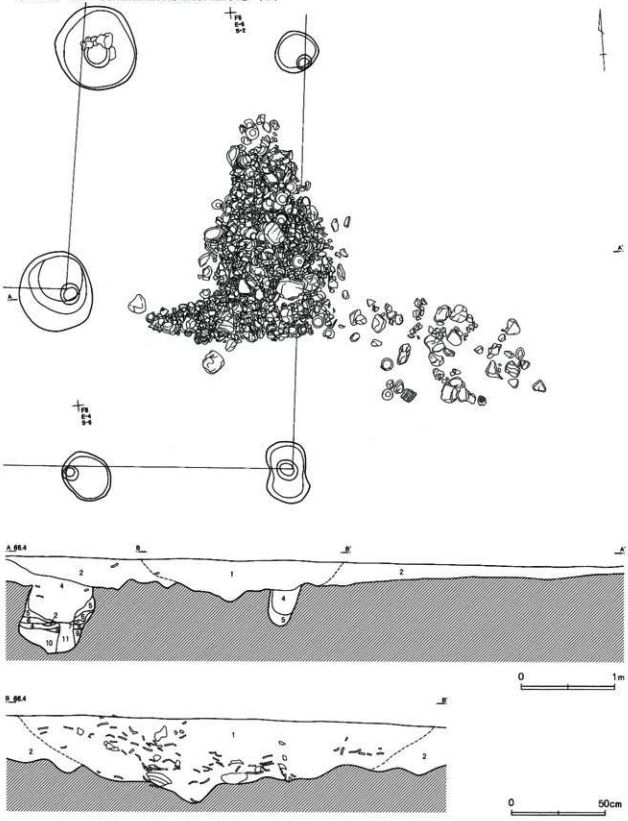
そこで急遽、この火災で倒壊した建物の規模・平面形等を確認するため、周辺部をさらに５cm下げ、黄褐色の砂質土の上面部を出すこととした。また第46号竪穴式住居跡の床面の貼り床を剥ぎ、さらに精査した結果、Ｐ５・６・20を確認することができた。さらに大形の井戸である第１号井戸跡の柱穴に重複してＰ14が確認された。さらに第47号住居跡の北側にあった、結晶片岩系の径１ｍの大石を沈めた、近年の大穴の覆土を除去したところＰ23を確認することができた。この結果、梁行き２間×桁行き２間の身舎に、四面に庇のつく建物（二間四面堂）が検出された。

身舎の柱穴は、円形の掘りかたで、掘り方の中央に身舎の柱が設置されている。身舎の柱穴は、長径0.92ｍ×短径0.95ｍ×深さ0.6ｍと大形であった。これに比べ、四面を巡る庇の柱穴は、径50cm前後と小規模であった。庇の柱は、身舎の柱と対になるように、柱通りを揃え掘られていたが、北・東面のＰ20・23は、不揃いであった。

なお第47号竪穴式住居跡が、いわゆる自然埋没によって平坦化した後、第４号掘立柱建物跡を構築したのではなく、第４号掘立柱建物跡を構築するため大量の



第454図　第４号掘立柱建物跡遺物出土状態（２）

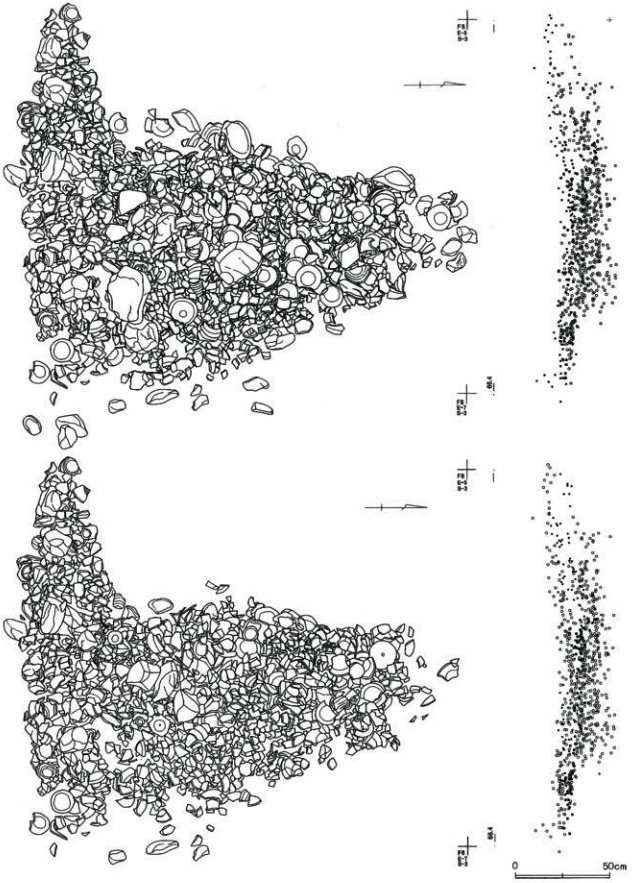


第455図　第４号掘立柱建物跡遺物出土状態（３）－礫－

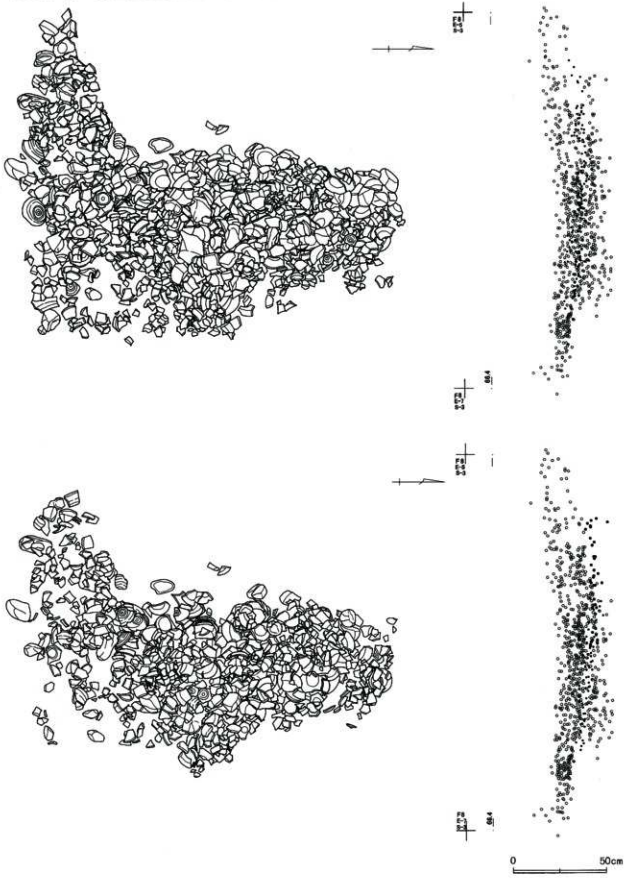
土砂で埋め戻したらしい。そのためＰ１のみは、第47号住居跡の床面下の安定地盤まで掘削されたため、0.8ｍの深さを測った。

身舎の柱痕跡は、柱穴確認面から確認でき、断面観察でも立ち腐れ状態を確認できた。つまり建物は焼失したが、柱材など強制的に抜き取らず、地上部分のみ

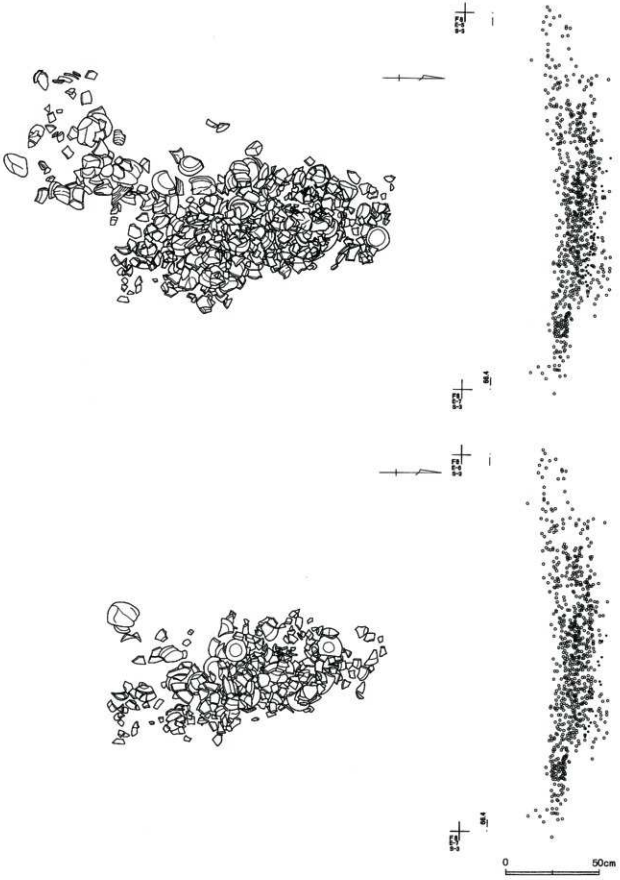
第456図　第４号掘立柱建物跡遺物出土状態（４）



第457図　第４号掘立柱建物跡遺物出土状態（５）



第458図　第４号掘立柱建物跡遺物出土状態（６）



第459図　第４号掘立柱建物跡遺物出土状態（７）